

學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 179

2017. 3. 8

神戸女学院

学報委員会

アメリカのリベラルアーツカレッジ視察報告

中学部・高等学部 部長 林 真理子

激動の昨年には世界各地でテロや紛争が繰り返され、多くの尊い命が失われました。多様性の受容や共感力で平和達成をとの祈り空しく、異質なものを排除する雰囲気や暗澹たる気持ちになったこともありました。イギリスのEU離脱やアメリカ大統領選挙の結果に「まさか」が現実になりうることを目の当たりにしました。

中高部では「愛神愛隣」の精神の下、落ち着いた学校生活と生徒・教職員の不断努力や挑戦が続いています。同時に、2020年度の大学入試改革や2021～22年開始予定の学習指導要領改訂をふまえ、変えるべきものと変えてはならぬものを見極め、周到な準備をする時期を迎えています。昨年作成の中央教育審議会のまとめに、新しい時代に必要となる資質・能力として「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「アクティブ・ラーニングによる主体的・対話的で深い学び」が明記されています。建学以来本学が守り続けてきたリベラル・アーツ教育の重要性が教育改革案で追認されたということです。「神戸女学院百年史 各論」の岡本道雄先生の記述によれば、神戸女学院は本格的な女性の高等教育を目指してリベラル・アーツカレッジとして創立されたアメリカのマウント・ホリヨーク・セミナリーをモデルとして創立されました。中高部でのリベラル・アーツ教育の更なる充実のためにも、原点であるアメリカのリベラル・アーツ教育について学びたいと思っておりましたところ、アメリカのリベラル・アーツ大学で学ぶ日本人学生に奨



学金授与している公益財団法人グルー・バンクローフ基金からお誘いを受け、10月に首都圏や名古屋の私学中高校長・教頭たち7人と一緒にプリンストン大学・スワスモア大学・カールトン大学（ミネソタ）・ボモナ大学を訪問してきました。プリンストン大学は総合大学ながら、academic instituteであると同時に undergraduate education を重視し、リベラル・アーツ教育を重視しているという理由で訪問しました。学長や入試広報担当者、教員との会談や授業見学、4大学で学んでいる日本人学生20名との懇談を通して学んだことをここにご報告いたします。

す。

1 つ目は residential college で教員と学生、先輩と後輩が寝食を共にし、濃密な人間関係を構築し、大学独自の文化を形成・継承していることです。プリンストン大のキャンパスですれ違う学生たちが、偶々当日誕生日であった日本人学生に口々に“Happy birthday!” と声をかけているのを見て、「このアットホームな雰囲気こそリベラル・アーツ教育」と思いました。24時間学生と起居を共にし、指導しつつ、研究も続けるのは過重負担にならないかと不躓な質問を訪問先の教授にぶつけましたが、どの教授からも「将来ある学生を指導することは喜びで、研究しつつ、教えることに生きがいを感じている。」という答えが返ってきました。プリンストン大はリベラル・アーツ教育にプライドを持ち、専門大学院を持たないという方針で他のアイビーリーグの大学と一線を画しています。必修科目もなく、学生は自由に科目選択ができますし、必須である3年次の junior paper、4年次の卒業論文作成では複数の教員から常時、懇切な指導助言が受けられます。スワスモア大学では、新入生のストレス軽減のために最初の学期の成績を「単位認定」か「不認定」の2種類のみにするなど、学生の気持ちによりそっていますし、2年生の終わりに学外研究者による口頭試問で選抜された学生には、教員と共に研究やプロジェクトに携わり、大学院並みの学習経験をする honors program の機会が与えられています。カールトン大は「知識こそフロンティア」というミネソタ人の学問への開拓魂を具現化した大学らしく、「全米で最も教育熱心な教授陣が集う」大学という名声を勝ち得ています。理系分野が充実していることや、大学院が設置されていないにも関わらず、卒業生の多くが Ph. D を取得するということでも有名です。ポモナ大では、近隣の4大学とコンソーシアムを形成し、学生が大学の枠組みを越えて自由に科目選択できるようになっています。「現在企業が求める人材はコンピューター科学を専攻しながら英文学を学ぶような人」とのポモナ大学長の説明からわかるように、広い視野と多様な知識、コミュニケーション能力を伸ばすために各大学が最大限の努力を

払っています。入試担当者は適性の高い学生選抜のため、徹夜で議論して選考するとも聞きました。教員一人当たりの学生数が10人未満という手厚い指導も魅力的ですし、終日使用可能な図書館や自習室、美術館や劇場、体育施設など学内施設面の充実も魅力的です。

2 つ目に学んだことは多様性への配慮です。どの大学も、外国から入学する学生数が全体の10%前後ですし、優秀な学生獲得のため、入試広報担当者が世界中を飛び回り、大学の魅力を宣伝しています。入学希望者の学校訪問への対応も充実しており、担当者との面談に加え、学生が自分の大学での体験を説明しながら学内を案内してくれます。その上、奨学金が潤沢に用意されており、外国人学生に特化したものも数多くあります。海外インターンシップや留学が奨励され、渡航費や経費のほぼ全額が大学から補助されるので、学生が語学力や新しい環境に適應する力を身に着け、視野を広げ、余裕をもって新たな挑戦に駒を進められるのです。

3 つ目に、各大学で新入生対象の writing seminar や writing center 等で作文力が強化されていることに感銘を受けました。視察団に同行された朝日新聞の三浦俊章編集委員が10月29日掲載「記者有論」で「単なる作文講座ではない。個々の学生の興味、専門に応じて細やかな指導が進められ、カリキュラム全体が書く力の養成で貫かれていた。ポモナ大学で見た新入生向けの授業は、(中略)教員との質疑でたえず発言を求められる。1学期に4本のレポートを書かせ、作文指導には、上級生とリサーチを助ける図書館スタッフも加わる。」と述べておられる通りです。懇談した日本人学生たちは、週60時間の読書と課題をこなすべく、寸暇を惜しんで勉強しつつ「講義一辺倒の受け身な授業ではなく、インタラクティブな授業はとても面白い」と目を輝かせます。彼らのアグレッシブな向学心に触発され、中高部でも、将来への目標を明確にし、果敢に新しい挑戦を続ける生徒たちのアクティブラーニングを一層支援すべく、学習内容と環境整備にまい進しなければと襟を正しました。2017年度がその第一歩になるよう、全力を尽くしたいと存じます。

KCCだより

[Kobe College Corporation (KCC) was established in 1920 in Chicago, Illinois, as a non-profit organization by a group of Christian philanthropists. Its original purpose was to provide financial support for the relocation of the Kobe College campus from Kobe to Nishinomiya. Ever since, KCC has been a strong supporter of the school, both materially and spiritually, creating opportunities for cross-cultural educational experiences for students and teachers. In 2004, the organization added "Japan Education Exchange" to its original name as its activities expanded beyond support for the school. Kobe College has benefited greatly from the generous support of KCC-JEE for many years.]

Japan and Kobe College: Bonds of Work and Friendship

President of KCC-JEE
Roberta Wollons



Japan has been a part of my life for three decades and I am delighted to be continuing my relationship with Japan in my capacity as president of KCC-JEE. In the fall of 1986, I traveled to Japan for the first time as a Fulbright lecturer to teach in

the Graduate School of Education at Tohoku Daigaku in Sendai. My field was American women's history and education history. My "closest colleague" was Prof. Rikio Kimura, a historian of Japanese education and a mentor to me. Much of what I have learned about Japan I learned that year, with the guidance and support of my colleagues and my hard working graduate students. For the first time, I experienced the cycle of seasons and work, holidays and festivals that mark the rhythm of a year and sustain relationships among family and friends. After my return home, I knew that one year in Japan was not enough and I would find a way to have more time there.

In 1990 I received research funding and returned to Japan to begin a project on Japanese women's higher education, beginning with the founding of Shoei kindergarten in 1889 in Kobe (now Shoei Tandai) and the founding of Kobe Jogakuin in 1875. I was intrigued to learn that the founders of Kobe College were among the first American women who, in 1873, joined the Congregationalist missionary women's boards. That began a very long project on the history of American missionary women who founded schools and colleges around the world. That summer, I spent many hours in the library and archives of Kobe College.

It was around that time, in 1991, that I was hired to teach in the new graduate program in American Studies at Doshisha University in Kyoto. This was the beginning of a long relationship with Doshisha University, Kansai, and my research on the founders of Kobe College, Eliza Talcott and Julia Dudley and Shoei Tandai, Annie L. Howe. I taught at Doshisha for five years and in 1996 was asked to give a talk to the Kobe College Corporation about the history of Kobe College and my research on the missionary founders. Following that talk I was invited to serve on the Board of KCC (KCC-JEE would come later), which I have done every year since 1997.

It has been a great pleasure to witness the growth and diversity of KCC-JEE over the years. We have supported and treasured our relationship with KC through programs that promote cross cultural experiences for Japanese and American high school students and teachers, college students and faculty, and graduate student research. Most importantly, the primary relationship between KC and KCC-JEE is between friends who have known each other over the years and shared experiences together that have enriched all of our lives.

Now, we look back on a remarkable history and look forward to the 100th anniversary of KCC-JEE in 2020. It is a significant accomplishment for any organization to last continuously this long, especially as an international partnership. There is much to celebrate in our partnership of a hundred years and much to anticipate long into the future. I feel privileged to be part of that partnership.

[コーベ・カレッジ・コーポレーション (Kobe College Corporation) は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体 (NPO) です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援を行い、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCC はその活動範囲を拡大するために、名前の後に “Japan Education Exchange” という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回執筆をしてくださったのは、2016年9月に KCC-JEE の新しい会長に就任されたばかりのロベルタ・ウォロンズさん、Dr. Roberta Wollons です。]

日本、そして神戸女学院 —仕事と友情を通して培われた絆—

KCC-JEE 会長

ロベルタ・ウォロンズ

「日本」が私の生活の一部になって30年になります。そして、日本との関わり合いを KCC-JEE の会長として続けていけることを嬉しく思っています。思い起こせば1986年の秋、私はフルブライト・プログラム派遣の講師として、仙台の東北大学大学院教育学研究科で教鞭を執るために初めて日本を訪れたのでした。私の専門は、アメリカの女性史ならびに教育史でした。一番親しくしていただいたのが、木村力雄教授、先生は日本教育史がご専門の歴史家であり、私のよき相談相手でもありました。私は、同僚や熱心な大学院生たちから、日本について多くのことを学びました。生まれて初めて、季節や仕事、そして休日やお祭りが1年のリズムを織りなし、家族や友人たちとの人間関係を円滑にするのだということを体感しました。アメリカに帰ってから、1年間の日本滞在は十分ではない、なんとかしてもっと日本に居たいと思うようになりました。

1990年、私は研究資金を得て、1889年の頌栄保母伝習所（現在の頌栄短期大学）創立や1875年の神戸女学院創立をもって始まった、日本女性の高等教育についての研究プロジェクトに着手するために日本

へ戻って来ました。1873年に会衆派教会の女性宣教師団に加わった最初のアメリカ人女性たちの中に、神戸女学院の創立者たちが含まれているということに、私はたいへん興味を持ちました。それが私の、世界中で学校や大学を設立したアメリカの女性宣教師たちの歴史についての研究の始まりでした。その年の夏は、神戸女学院の図書館そして史料室にこもって調査研究に没頭しました。

ちょうどその頃、1991年のことですが、京都の同志社大学大学院にアメリカ研究の新しいプログラムが開設され、そこで教鞭を執ることになりました。それが、同志社大学、関西地方、そして神戸女学院の創立者であるイライザ・タルカットとジュリア・ダッドレー、頌栄短期大学の創立者であるアニー・エル・ハウとの長い付き合いの始まりでした。同志社大学で5年教えた後、1996年に、コーベ・カレッジ・コーポレーション (KCC) で神戸女学院の歴史とその創立者である宣教師たちについて講演をする機会を得ました。この講演がきっかけとなって、1997年から KCC（現在は KCC-JEE）に理事として迎えられ、現在に至っています。

長年にわたって、KCC-JEE の成長や発展に立ち会って来られたことは大きな喜びです。日本とアメリカの中学や高等学校の生徒や教師、大学生や教員、大学院生の研究などを対象とした異文化交流体験を促進するプログラムを通して、私たちは神戸女学院との関係を支持し、また大切にしてきました。最も素晴らしいと思うのは、神戸女学院と KCC-JEE の関係が、長年の友だちのようにお互いをよく理解し、経験を分かち合うことで、お互いの人生を豊かにしてきたということです。

以上、これまでの目覚ましい足跡について振り返ってきました。そして私たちは2020年に KCC-JEE が創立100周年を迎えることを心待ちにしています。これだけの長きにわたって国際的な協力関係のもとにある組織が存続しているというのは、本当に意義深いことです。私たちの100年に亘る協力関係を大いに祝い、また今後も長く継続されていくことを願います。そしてその一端を担えることを光栄に思います。

KCCだよりに添えて

創立者ダッドレー先生遺愛の机がつなぐ縁
そして

ドレーク・ファミリーとの三代にわたる交流

2015年10月、ケンタッキー州レキシントン在住で、創立者ダッドレー先生の弟、エドワード・ダッドレー氏の玄孫（孫の孫）にあたるジュリア・ヴァッサー・サムソン氏 Ms. Julia Vassar Samson から、KCC-JEE を通して、「祖母の大伯母にあたるジュリアの机を神戸女学院に寄付したい」というメールが院長室に届きました。

その後やりとりを重ねて、ダッドレー先生が日本の家具職人に作らせて愛用し、1895年に引退して帰米する時に大事に連れ帰られた机と椅子、付属の装飾品など一式をいただけることになりました。2016年2月にケンタッキーのサムソン邸を出発して、陸路ロサンゼルスへ、ロサンゼルスからは船で神戸へ、そして2トントラックに積みかえられて、3月18日に岡田山へとやってきました。（この件についての詳細は、『学院史料』第30号でご報告しています。）

以来、3月23日に、評議員会出席のためにシカゴからおいでになった杉浦剛会長（当時）を皮切りに、KCC-JEE から次々にお客様をお迎えしています。

6月15日には、初代 KCC Graduate Fellow（日本研究をする大学院生への奨学金制度で、本学大学院生との交流がプログラムに組み込まれている）で、現在は理事としてこのプログラムの委員長をおつとめの Dr. Cindi Sturz Sreetharan が、当時の指導教官だった本学の濱下昌宏名誉教授とご一緒に。

7月8日、元中高部英語教員で、ウェブサイト担当理事の Dr. Marnie Jorenby が、先生の召天110年記念礼拝にご出席のあと、門戸在住時代のご近所さんとご一緒に。

10月26日には、本学卒業生で、お仕事の関係でアメリカ在住のところ、請われて KCC-JEE の理事にご就任、続いて KCC-JEE 枠の本学院評議員もお引き受けくださった水野多美さんが、本学院の理事・評議員のみなさまとご一緒に。

そして、12月6日には、ダッドレー先生の妹、メアリー・グロス氏の玄孫にあたるというご縁で2006年から理事をおつとめの Ms. Angie Jeanette Gaspar が、ご夫君の Dr. Scooter Johnson および二人のお子様と共に机とご対面くださいました。

また、2016年10月12日、141回目の創立記念日に、学院は、Dr. Mitchell Erickson をお迎えしました。おじいさまは、長く KCC の会長をおつとめくださり、現在も客員教員派遣プログラムの名前になっている Dr. Bryant Drake、伯父様は、客員教授として2度にわたって神戸女学院大学で教鞭をとられた Dr. Richard Drake という、学院には深い所縁のある方です。アメリカ合衆国国土安全保障省の PCB（ポリ塩化ビニフェル）の研究者で、神戸国際会議場で開催される The 9th PCB Workshop に参加するための初来日の機会に、ご一家が深い関わりを持って来た神戸女学院訪問を希望されました。同日は、張野環境・バイオサイエンス学科長のご案内で、森院長と懇談、飯学院チャブレンによる創立記念日礼拝に出席、キャンパスツアー、斉藤学長、溝口副学長と懇談、人間科学部教員との昼食会という盛りだくさんのスケジュールでお迎えしました。ご自宅に郵送した学院グッズの数々は、92歳の今もご健在の伯父様に、報告と一緒にお届けになったと伺っています。

（院長室課長）



サムソン夫妻とダッドレー先生遺愛の机



1943年のドレーク一家



エリックソン博士

2017年度年間標語

あなた方は神に愛されている子供です
から、神に倣う者となりなさい。
(エフェソ 5:1)

学院チャプレン 飯 謙

「神ってる」ということばが2016年の「流行語大賞」に選ばれました。機会にも恵まれ、期待以上の結果を出したときに使われた表現のようです。この1年間にもっとも人々の心を掴んだことばですから、世の願いも、実力以上の状況の現出にあるということなのかもしれません。エフェソの信徒への手紙が語る「神に倣う」ことも、そのような超常的な力の体得に目的を置いているのでしょうか。

エフェソ書の著者（紀元1世紀後半）がこの書を執筆した動機として、知的な認識と神秘的な儀礼をもって神との一体性が完遂されると主張するグノーシス主義との対立があげられます。この立場からは、隣人愛の具現化はもちろん、イエスの十字架さえ不要なものとなります。エフェソ書を4章の後半から追うと、「神に倣う」ことが、隣人に真実を語り、悪事と悪意を捨て、互いに親切にし、赦し合う営みの延長線上に置かれていることに気づきます。「神に倣う」ことは、神憑った事柄ではなく、他者への善意あふれる生き方を指しているのです。

「神に倣う」は、人が「神のかたち」に創造されたという創世記第1章の記事を想起させます。このテキストは、神がそうであるように、自己中心的ではなく、他者本位に、互いに受け入れ合い、尊敬し合い、仕え合いつつ歩むよう促しています。神戸女学院はこのメッセージを受けて創立されました。

神からの呼びかけを大切に（愛し）、隣人を愛することは、創立以来神戸女学院が教育理念の中心に据えてきた、人間の根本的なあり方です。ドイツ語で人格形成や教育を意味する語（Bildung）は、上で言い及んだ「神のかたち（Bild）」から派生したと申します。改めて建学の祈りを心に刻み、学ぶ人、働く人、支える人、ともどもに、神戸女学院が志す「神に倣う」人へと思いを馳せたく存じます。



クリスマス報告

〈大 学〉

平和を祈りながら今年もクリスマスの時期をむかえました。例年と同じくクリスマス前の1週間は各学科によるチャペルアワーをまもりしました。演奏や合唱、心温まるクリスマスのエピソードをうかがうなど、それぞれ学科の特徴が表れたチャペルアワーとなりました。

クリスマス礼拝当日となる12月16日の金曜日は、授業の時間割を変更し、正午から大学クリスマス礼拝を皆でまもりしました。夜に行われる学院公開クリスマス礼拝と同じく、音楽学部による演奏・合唱奉仕の中での賛美礼拝は、主イエスの誕生を祝い、敬虔な気持ちを思い起こします。今年は新任の松浦修先生の指揮のもと、新しいクリスマス賛美礼拝となりました。高等学部によるハンドベル演奏との共演、点火時の会衆席の光、プロジェクターによる歌詞の投影もあり、神戸女学院の伝統を受け継ぎつつも今までと色が違う礼拝となりました。奨励は日本基督教団千里聖愛教会の川江友二先生に「アモレ」と題してメッセージをいただきました。「おめでとう」とは「愛でる」という語から派生し、「あなたを愛したい」「あなたを大切にしたい」という意味を持ちます。イエスが生涯をかけて闇の中にある人々、絶望や苦しみにとらわれている人々を大切に、共に歩まれたように、私たちも苦しみの中に囚われている人々に寄り添い、日々を過ごしていきたいと思います。

終了後には、出口においてチョコレートのプレゼントが、院長先生や学長先生、宗教活動委員の先生方、学生ボランティアによって、出席した学生に配られました。皆で共にいただき、主イエス降誕の喜びを分かち合いました。

また、学生ボランティアには今年もクリスマス礼



大学クリスマス礼拝

拝での舞台照明、受付のスタッフとして奉仕をしていただきました。

昨年に引き続き、会場のほのかな灯りの中、暗闇の中に灯る壇上の蠟燭の光に、キリストの生涯と福音を感じる大切なひと時となりました。

〈神戸女学院 公開クリスマス礼拝〉

学院全体でまもられる公開クリスマス礼拝は、今年で44年目をむかえました。

今年も、学院オルガニストの片桐聖子氏による前奏が講堂に響き渡り始まりを告げました。続いて、高等学部生徒によるハンドベル演奏、招詞、一同による讃美。会場の電気が消され、壇上の蠟燭の灯りだけがゆらめく中、音楽学部による演奏が会場を包みます。聖書が読まれ、中高部コーラス部による合唱。森孝一院長から「闇のなかで光を信じる」と題してメッセージをいただきました。世を見渡すと悲しい現実があふれております。神はこの深い闇の中に希望の光として「インマヌエル（神は我々と共におられる）」とひとり子を与えてくださいました。私たちは闇の中でどんなに小さくとも光を信じて、周りの人々の喜びと安らぎ共に与え合い、主を信じて歩んでいきたいと願いますとお話してくださいました。

再び音楽学部の演奏。松浦先生、喜多先生に指揮をしていただき、オーケストラ、ハンドベルの演奏に心をゆだねるひと時が与えられました。そして一同で高らかにクリスマスの讃美歌を歌い上げ、最後に祝福をもってクリスマス礼拝は終わりました。

学院全体が大切にまもっているこのクリスマス礼拝は、神戸女学院がキリスト教主義学校であることを強く伝えられる大きな機会であり、また学院として共にひとつの祈りのときを持つことができる大切な場です。来場者数も満席で、皆様がこのひと時を変わりなくお覚えくださることを44年目の節目として改めて心に刻み、心より感謝申し上げます。

次年度以降も主の恵みに共に与かるひと時を、神戸女学院に連なる者として、一緒に過ごしていただけるよう祈るものです。

司式：中野 敬一 奨励：森 孝一

指揮・編曲：松浦 修

合唱・管弦楽：神戸女学院大学音楽学部

ハンドベル・中高部コーラス指揮：喜多 牧子

奏楽：片桐 聖子

(チャプレン室)

〈プレゼント・献金報告〉

★施設へのプレゼント

今年も大阪水上隣保館（大阪府三島郡）と神戸真生塾（神戸市中央区）へプレゼントをお届けすることができました。神戸真生塾には、J家庭科研究部による手作りの小物とS料理研究部が焼いた名前の入ったクッキーを合わせてプレゼントしております。

東日本大震災から始めた、福島にある社会福祉法人 牧人会（福島県西白河郡）の白河めぐみ学園と白河こひつじ学園にもプレゼントをお送りしました。

個人情報保護の問題もあり、続けていくことがなかなか困難な行事となってきましたが、誰かがあなたの事を思い、支えたいと思いを寄せているその気持ちだけでも子ども達に伝えることができるよう、これからも行っていきたいと思います。

今年は神戸真生塾には中高部自治会の方々、福島には先方のご都合により郵送で、大阪水上隣保館には飯チャブレンが、サンタクロースの代表としてプレゼントを運んでくださいました。合わせて感謝と共に報告させていただきます。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

皆様、ありがとうございました。

（チャブレン室）

〈中高部 クリスマス燭火賛美礼拝報告〉

12月19日（月）、講堂にて中高部のクリスマス燭火賛美礼拝を守りました。

礼拝前、照明を落とした講堂の壁には救い主の降誕の場面が映し出され、前奏曲の響きによって厳かであたたかな雰囲気がつくりだされていました。

招きの言葉から礼拝が始まりました。S2音楽選択者によるハンドベルの清らかな演奏に続いて、JSコーラス部生徒が讃美歌を歌いながら入堂してくると、講堂全体が聖堂にいるかのような雰囲気に包まれました。

聖書の朗読と賛美を交互に捧げながら、クリスマスの出来事を振り返り、その意味を確かめる時を守りました。また、今年はS3音楽選択者によるリコーダーの演奏もあり、印象深い礼拝となりました。

この日は神戸イエス団教会の上内鏡子牧師により「小さな光」という題で説教をしていただきました。冒頭に、星を動かす少女にまつわる詩をご紹介くださり、クリスマスの星もまた、当時の人々の目には留められなかったのではないかと話されました。また、星という字に込められた意味についても話され、静かな夜にひっそりと馬小屋でお生まれになったキリストの生涯について考える機会になりました。

礼拝の中で講堂の壇上にキリストを象徴するローソクと、信仰、希望、愛を象徴する3本のローソクに火が点され、私たちの心に点された希望の光について考える時が与えられました。賑やかに過ごす毎日の中で、私たちは小さな火を見過ごし、その火を吹き消そうとしているかのように振る舞っていることがあるのかもしれない…。そんな思いを抱く時となりました。司会者の祈りの中で、壇上に灯された火がキリストの教えられた信仰、希望、愛の象徴であることが触れられ、それぞれの心にもクリスマスの灯が灯されたことを感じました。その灯を隣人のために掲げて歩む者でありたいと思います。また、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」というクリスマスのメッセージにふさわしく応答する者でありたいと思います。

「いそぎきたれ」を繰り返し歌いながら退堂して礼拝は終わりましたが、それぞれの者が新しい希望と決意をもって講堂を出発する機会になったと感じています。

すばらしい礼拝のためにご奉仕くださいましたすべての皆様に関心から感謝いたします。

（JS宗教部）

退職のことば

個人情報保護のため、9ページ目から
12ページ目は削除しています。

史料室の窓(42)

人生の誠律

神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵

1967年3月24日、講堂において一つの学院葬が執り行なわれました。同年3月12日に82歳で召天された神戸女学院第6代院長・畠中 博先生を追悼するものでした。先生は、代々アメリカ人宣教師が院長を務めてきたミッションスクール・神戸女学院において、日本人初の院長として日米開戦によってアメリカ人が引き揚げた後の学院のキリスト教女子教育を、戦前・戦中・戦後を通して守り抜いた牧師であり、教育者でした。今年は先生の没後50年に当たります。戦時中、神戸女学院がミッションスクールとして守られたのは先生が精神的支柱となり、時には体を張って時の政府や軍部と対峙してくださったからでした。それは武勇伝として語り継がれていますが、先生は何よりもまず、牧師でした。その根底にあった先生のキリスト者としての姿について考えてみたいと思います。

牧師としてすでに有名であった先生を学院が迎えたのは1923年9月、大学部長（現在の大学長に当たる）としてでした。初めての聖書の授業はローマの信徒への手紙を用いたものでした。授業を受けた学生は「初めて聖書を読むことの面白さ、楽しさを覚えた」と言っています。「常に永遠の真理を説き、私共に人類最高の理想を追究せよ、と教えられた」と。就任後、最初の卒業式ですはずだった説教の原稿が残っています（当日、病気のため説教ができなかったので、『めぐみ』に原稿の全文が掲載された）。『人生の誠律』という題で、人生最大の目標は友愛を育むことであり、寛容の精神が人の心を開く鍵となる、と説きます。最高の人生とは友として生きること、「神戸女学院卒業生諸姉が人類の友として生きる光榮を与へられん事を祈つて止まない」（1924年8月28日発行『めぐみ』第4号付録）と結ばれています。この説教の背景にはアメリカでの排日移民法の実施（1924年7月1日）があったかもしれません。

先生の演説には独特の調子と響があったそうです。卒業生はそんな先生を「宗教教育に対する大きな夢と理想」を持って情熱を傾けて「毎日のお説教に一番の生きがいを感じていたように思う」「すべては神の栄光のためにという強い信念が表われていた」と述懐します。先生の話が魅力的であるのは、そういう筋の通った真心からほとばしり出るものがあったからだ。

とはいえ、先生は学生時代、牧師と教師にだけは



畠中 博先生 (1885-1967)

なりたくないと思っていたそうです。しかし軍人の心況や生活態度を見てきて、どうしてもこの2つ以外に自分の使命を果たせる職業はないと痛感したといひます。「神様は僕を牧師とか教師とかいう枠の中に閉ぢ込めておられるのです。僕の様な罪人は枠の外では何をするかわからないからでしょう。」そして「自分が女学院にいるのは神様が鎖でつないでくださっているような気がする。この鎖がなかったらどんなことをしているか分からない、もっと悪いことをいい、もっと悪いことをしているだろう」とよく冗談めかして語っておられたといひます。そんな先生を教え子たちは「先生の内には神によって捕えられ神の栄光のためにのみ働く者としての強い意識と使命感とそれから神のほか何者をも恐れない逞しい信仰とが躍動していた」と証し、「この場所に特にこの時代につながれて御業を行なわれた先生を偲ぶとき、御摂理の不思議を思う」と畠中先生を神戸女学院に遣わされた神に感謝を捧げています。

「五十年や七十年の短い人生で達成するようなチツボケな理想ではだめだ。」

「今できないことはいつまでたってもできないよ。」

苦難の時代を担ってくださった先生の若々しい言葉は今も私たちに語りかけています。

人事

個人情報保護のため、
一部削除しています。

慶弔

栄誉

新刊紹介



河西秀哉(総合文化学科准教授) 著

『うたごえの戦後史』

人文書院 2016年10月刊
202頁 2,200円+税

声を合わせて歌うことは、紛うことなくアート体験である。それと同時に、互いの声を聴き合い重ねていくことは、「わたし」⇔「わたしたち」⇔「わたしたちみんな」という関係性を、互いに絶え間なく問い直しながら創り上げるという、極めて社会的な営みでもある。本書において河西秀哉先生は、合唱が持つこの社会的な側面を、近現代の日本の歩みに則して整理し、展開していく。

本書ではまず、戦時体制の中で士気高揚のために、厚生運動として展開した合唱運動が語られる。第二章では、職場や教育現場で、これら戦時体制下での取り組みが十分に省みられないまま、民主的価値観と適合する活動として合唱運動が展開する様が描かれる。第三章は、1950年代に急速に広がったうたごえ運動に関する論考である。うたごえ運動が次第に政治性を越えて、人びとの連帯への希求に呼応する存在となっていった過程が語られる。第四章では一転して、おかあさんコーラスが論じられる。戦後、多くが専業主婦化への道を辿った女性たちは、歌うことを通じて近代家族の理念(良妻賢母)を実践し、女性同士の紐帯も形成していったのである。これらすべてを射程に入れ、メディア表象(映画)から俯瞰し直したのが第五章である。さらに議論は00年代以降の合唱再興の兆しと、その内実の変容を指摘して終わる。

合唱を通じて(西洋)音楽を広めたい音楽家の無邪気な欲望は、芸術すらも国民統制の手段としてはばからない日本の文化施策に自覚なく巻き込まれたのだろうか。あるいは自らの生存の手段として、したたかに政治を利用したのは音楽家のほうなのだろうか。近年における「一緒に歌うことの再評価」はどう評価すべきなのだろうか。本書に触発された読者は、様々な思いを巡らせることになるろう。

(総合文化学科教授 横田 恵子)

新刊紹介



吾妻壮(心理・行動科学科教授) 著

『精神分析における関係性理論』

誠信書房 2016年11月刊
164頁 3,000円＋税

本書は氏の初めての単著の論文集である。普段、大学院で心理臨床の指導教育を共に担う者にとり、本書によって氏の卓越した洞察や的確で実践的なコメントの源泉に、また氏の実践的かつ学問的な関心にも触れることができ、大変うれしく思う。

フロイトに始まる精神分析は既に100年の歴史を持ち、英米を中心に幾つかの学派に分かれ相互に緊張関係を保ちながら発展している。昨日本国では英国の精神分析が主流を占め、米国の精神分析の近年の展開については多くの関心を向けられることはなかった。氏は米国でほぼ10年に及ぶ留学と精神分析家になるための訓練を受けて来られたが、オーソドックスな精神分析的自我心理学に始まり、関係性パラダイムの最先端を行く関係性精神分析で資格を取り、実践を重ねておられる。ゆえに本書では米国の精神分析の展開が簡潔に紹介され、かつ英国の精神分析とも比較対照が為され、氏の博識と一学派に偏らないバランスの取れた解説にも助けられて、米国の精神分析の現状を知る格好の書ともなっている。

本書の後半は氏自身の精神分析臨床の経験に基づくいわゆる事例研究の章が続く。精神分析臨床における患者と分析家の相互交流と分析家自身の心に生じる情緒経験が実に細やかに描写され、かつ精神分析学の諸概念を用いてそれらについて考え、治療的関わりを工夫していくというプロセスが生き生きと描かれ、読者はそれを追体験することができる。本書を読めば精神分析が実に関係的な営みであり、かつ情緒の微細な流れを丹念に感じ取りそれを素材に洞察を深めていく、如何に緻密で忍耐の要る作業であるかがわかるであろう。今後の氏の実践、思索の成果が第二、第三の論文集となって発刊されるのが待ち遠しい。

(心理・行動科学科教授 石谷 真一)

その他の新刊一覧

高村 峰生(英文学科准教授) 著
『触れることのモダンティ』 (以文社)田辺 希久子(英文学科教授) 訳
(翻訳協力: 本学文学研究科在学生・卒業生他)
『真のダイバーシティをめざして』
—特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育—
(上智大学出版)立石 浩一(英文学科教授) 訳
『ユ・テヨン 折り紙作品集』 (おりがみはうす)河西 秀哉(総合文化学科准教授) 編
『「うたごえ」運動資料集 第1巻～第3巻』
(金沢文庫閣)石川 康宏(総合文化学科教授) 他著
『変革の時代と「資本論」—マルクスのすすめ』
(新日本出版社)三宅 志穂(環境・バイオサイエンス学科准教授) 他著
『Science Education
—An International Course Companion—』
(Sense Publishers)田岡 千明(共通英語教育研究センター専任講師) 他著
『IELTS スピーキング・ライティング完全攻略』
(アスク出版)田岡 千明(共通英語教育研究センター専任講師) 他著
『TOEIC® LISTENING AND READING TEST
990点突破ガイド』 (明日香出版社)

CD 紹介

辻井 淳(音楽学科教授) -ヴァイオリン-
藤井 由美 -ピアノ-
『G線上のアリア』 (オタケンレコード)Xavier LUCK(音楽学科専任講師) -フルート-
岡田 将(音楽学科准教授) -ピアノ-
『PAUL TAFFANEL MASTER FANTASIST and
HIS INFLUENCE』 (カメラータ・トウキョウ)

＜キャンパスお気に入りの場所＞

ゆるぎなき伝統を感じつつ

「キャンパスお気に入りの場所」の執筆順が回ってきましたが、目ぼしいスポットは諸先輩方によって紹介されていますので、少し違った視点から触れてみたいと思います。

それは、神戸女学院の歴史が詰まった「倉庫」です。私が所属する総務課も、複数の倉庫を管理しています。日々の業務の中では、多くの無理難題を目の前にして行き詰まることもしばしばですが、その時はあえて静かな倉庫に籠ることで、落ち着きを取り戻しています。

倉庫で「発掘」した資料の中で、特に印象的だったのは、戦後から高度成長期に至る岡田山周辺の写真の数々です。周辺の環境変化は目覚ましいものがあり、急速に市街地化が進んでゆきましたが、このキャンパスだけがあたかも取り残されたかの様に変化しなかったことには驚きを隠せません。

その倉庫も多くは温度・湿度の管理が十分でなく、正直なところ保存環境は良好ではありませんが、戦前の記録すらさほど劣化せずに残っており、和紙やモノクロ写真の保存性の高さを思い知らされます。古いものには現在の技術でも太刀打ちできない強靱さを感じさせます。

私自身もこの和紙のようにゆるぎなき伝統を受け継ぎつつも、良き方に進むことを祈るだけでは責務を果たすことはできませんので、意識と行動を変革して世間に認められる結果を出せるように精進する所存です。

(総務課)



50周年記念誌（大正14年発行）と岡田山落成式

坂の上の出会い

昨年3月のこと。出勤するため、私はいつものように正門をくぐり坂道を上りはじめました。坂道がちょうどデフォレスト館方面と音楽館方面への分かれ道に差し掛かったとき、側溝付近に何か見慣れないものを発見しました。

せっかく息を切らし上ってきた坂道でしたが、興味に駆られた私は、数歩引き返してその正体を確かめることにしました。目を丸くしてよく見ると、それは小さなドングリでした。見慣れたはずのドングリに違いないのですが、奇妙なことに、丸みを帯びた面を上にして立っていたのです。そのため、私の目がそれを奇異と認識し、歩みを止めたのでした。

周囲に人がいないことを確認し、再度詳しく観察してみると、果皮が割れ、なんと発芽していることが分かりました。島根県の自然豊かな環境で生まれ育った私ですが、ドングリの発芽を目にするのは、これが初めてでした。

生育を見守りたいという思いも叶わず、発見から数週間後、坂の上の堅果は落ち葉に埋もれ、姿を消しました。あれから1年の月日が経ったいまでも、私は毎日坂道を上り続けています。発見現場の横を通る度、あのドングリは無事に地に根を張り、青葉を茂らせたのだろうかと思いを巡らせます。私のお気に入りの場所、それは、動植物との一期一会を感じさせてくれる、この緑豊かなキャンパスそのものです。

(キャリアセンター)



坂の上の堅果

大 学 報 告

高大連携授業報告

今年度で2年目となる中高部共催、英文学科模擬授業を、10月28日、31日、11月2日に中高部コムホールで実施いたしました。通訳・翻訳プログラムの体験授業で、通訳ワークショップはS1全員、絵本翻訳ワークショップはS2生全員が対象でした。後日、中高部からいただいたアンケート結果やコメントから、殆どの皆さんが昨年同様、授業に満足されたようで、嬉しく思っています。以下、担当者からの報告です。

(英文学科長 和氣 節子)

垣間見る通訳の世界―逐次通訳&同時通訳体験授業

去る2016年10月28日、神戸女学院高等学部のS1Cクラス(9:05～10:45)、S1Aクラス(11:00～12:40)の生徒に対し、中高部コムホールにて通訳の授業を実施した(S1Bクラス対象の授業は英文学科奥村准教授により同日午後から実施された)。

通訳という営為の何たるかを垣間見せるという目的を達すべく、通訳概説、教材スピーチの内容理解、同スピーチの逐次通訳実践および同時通訳実践という4部構成の体験型授業とした。具体的には、1)通訳概説動画鑑賞・同動画内容に関する質疑応答・各種通訳方式の解説、2)教材TEDスピーチ(Matt Cutts: Try something new for 30 Days)動画鑑賞・同動画内容に関する質疑応答・トランスクリプトを使用した内容理解確認ペアワーク、3)逐次通訳ペアワーク・教員による逐次通訳実演、4)教員による同時通訳実演・視訳ペアワーク・簡易同時通訳機器使用による同時通訳体験グループワーク、という大変意欲的なもので、「何か新しいことに今日から30日間取り組んでみよう」と呼びかけて授業を締めくくった。

スキルの段階的獲得へ向けた漸進的演習を重んじる通訳教育の世界において、初学者に対し実質100分という短時間に逐次通訳も同時通訳も体験させる授業を施す慣行はどの国にも存在しない。その意味で本体験授業は世界的にも珍しい特別授業となった。

(英文学科准教授 中村 昌弘)

“An Introduction to Translation through Picture Books”

In November, S2 students took time out of their regular English class and learned about the world of translation during a special lecture and workshop offered by Professor Kikuko Tanabe and me. While the lecture began with an overview of the translation industry, the focus of the class was on picture book translation. Students were soon tasked with an on-the-spot English to Japanese translation assignment of the book *Rosie's Walk* (Pat Hutchins, 1971). An animated reading of the book brought home the fact that these books are meant to be read aloud. Translating the simple text of a picture book may sound easy, but students soon discovered that it was a unique challenge. They had more time to spend on the Japanese to English translation homework: an excerpt from *Tatsu-kun no omiseban* (Masako Matsuno, 1987). The final portion of the class was spent talking about topics such as translating onomatopoeia and character names, and the importance of maintaining rhythm, rhyme and repetition in picture book translation. Students left with a deeper understanding of the difficulty and joy of creating a sound translation.

(Susan E. Jones)



バナガイド(ポータブル簡易同時通訳機器)を用いての通訳体験(S1生)



英文学科「通訳理論と技術」模擬授業

大学と社会の危機の中で

社会学科から総合文化学科への改組が行われたのは、1976年のことでした。この40年間にどれほど多くの学生、院生が入学し、卒業し、どれほど多くの教職員が入職し、退職していったでしょう。そのすべての人々の営みが、いまある総合文化学科を形づくりました。

75年に書かれた「学科増設協議書」（原文のまま）は、大学が当面する課題を次の4つにまとめています。①いわゆる大学の大衆化による学生の関心や要求の多様化に対応する問題、②情報化時代と称される知識量の飛躍的増大に対応する問題、③専門分野の細分化による知識の断片化・専門分野間の閉鎖的セクショナリズムを克服して学問の総合的統一性を回復するという課題、④複雑多岐な現代の国際環境の中にあってより一層の平和と福祉とを実現することを目ざして、国際理解と文化交流とをより一層推進し得るような役割を担うという課題。

いずれも実に的確な状況把握でした。その後、これらの課題はさらに拡大し、①については「大学全入時代」という言葉が生まれ、②についてはインターネットの急速な普及が、③については多くの研究者が、少なくとも若い時期には領域の「細分化」を甘受せずにおれず、④については貧困と生活不安が世界と日本にむしろ拡大しています。

その中で深刻なことは、少子化と高等教育予算の圧縮が生んだ大学間競争の激化の中で、このような大学本来の課題を論ずる以前に「いかにして受験生を確保し、どのようにして生き残るか」という大学経営上の課題に、私たち教員も多くの時間を振り向けざるを得なくなっているということです。これはひとり大学だけの危機ではなく、日本社会そのものの危機を意味するものでしょう。

こうした危機を乗り越えるために、大学は今どのように知性を発揮すべきなのか。おかれた状況の厳しさに屈することなく、この問いへの答えを見いだす努力と発言を続け、それによって神戸女学院大学と総合文化学科を大学らしい大学のまま、後につづく人たちに手渡していかなければならないとあらためて強く思っています。

（総合文化学科教授 石川 康宏）

クローバーゼミ始動！

2016年度後期、有志の学生に対して人文・社会・自然の各分野の教員が協働で担当するクローバーゼミが開講された。履修学生は全学科にわたる36名、テーマは鯨である。社会分野の小林知博先生は捕鯨の是非について賛否双方の立場を示し、学生は指定された立場からディベートを行った。自然分野の高岡素子先生は生物としての鯨についてミニレクチャーをし、学生は鯨の生態に関する実験をプレゼンした。人文分野の高橋は文章を書くための発想法や文献調査の手法を伝え、学生は自ら問いを立てレポートを提出した。

参加学生はみな意欲的で、主体的に深く学んだ。何よりも他学科の学生と話すことで視野が広がったという。これは今回の試みの成功の証である。一つのテーマを様々な観点から様々な人々と論じつつ学ぶことが、クローバーゼミの基本理念だからだ。

2017年度からのクローバーゼミは全学生必修で、週2回の授業数、教員は1クラス9回、3クラスを担当する。厳しい条件だが、教員の熱意はそれをクリアし、学生はその熱意に必ずや応えてくれるだろう。4回では伝えたいことを伝えきれないとは、2016年度担当者の共通認識である。

毎回の授業内容はメールで予告・報告された。実際の授業は公開され、映像に記録された。映像はMoodleを通じて視聴可能である。クローバーゼミを支えてくださった視聴覚センター職員をはじめ、関係者各位に心より感謝する。

（総合文化学科教授 高橋 雅人）



ディスカッションする学生たち

第41回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) 大会報告

本年度も英文学科では、KCSSES 大会を11月の最終金曜日に文学館にて開催した。グローバル・スタディーズコースが学会準備を担当し、国際移住機関(IOM) 駐日事務所、プログラム・マネージャーの清谷典子氏(博士 国際政治)から、特別講演「人の移住と国際移住機関の活動」を拝聴した。清谷氏が実際に関わってこられたアフリカ諸国(ケニア、ソマリア、ジブチ、ルワンダ)での多様な IOM の活動具体例から、正に時宜を得た移民問題について、「人の移動(移住)」の定義から根本的に、かつ多角的に考えることができた実のある時間となった。

学会前半部には、英文学科を3年前に卒業後、更に各自の研究テーマに応じた進学先で研鑽を積んだ3名(E131)のチャレンジャーたちの研究を聴いた。発表者(ABC順)とタイトルは以下のとおり。安保夏絵氏(大阪大学博士後期課程在学中、修士)「変容する V.、混濁の V.-V. に見るサイボーグ・フェミニズムの可能性」、西川美咲氏(大阪教育大学大学院修士課程修了、修士(教育学))「生徒の自尊心を高めることに焦点をあてた授業実績」、高橋未希氏(ロンドン大学 UCL 現代ヨーロッパ研究修士課程修了、MA)「Muslim Migrants in Contemporary Germany」。現在の英文学科、各3コース(英米文学文化、言語コミュニケーション、グローバル・スタディーズ)の興味深い研究発展の可能性を示した発表は、卒論に取り組む在学生を刺激する内容の濃いものだった。

(英文学科長 和氣 節子)



ご講演中の清谷典子氏

第7回神戸女学院大学絵本翻訳コンクール表彰式

第7回神戸女学院大学絵本翻訳コンクールには266校から1345の応募が寄せられた。課題絵本は、Mary & Rich Chamberlin の手になる『Mama Panya's Pancakes』。ママとアディカが暮らすケニアの村を舞台に、分かち合いがもたらす幸せの輪が広がる物語だ。

厳正な審査を経て選出された入賞者(最優秀賞1作品3名、優秀賞1作品1名、佳作3作品6名、計10名の高校1・2年生)ならびに引率者を招いて、去る2016年11月26日、めじらウンジにて表彰式が開催された。

本学出身のベストセラー絵本作家、真珠まりこ審査委員長による総評で幕を開け、最優秀賞・優秀賞各受賞作品の朗読、そして茶話会へと催しはとり運ばれた。肘を突っ張り、肩を強ばらせて総評を噛み締めていた生徒諸君は、自作朗読の段になり声優顔負けの演技を披露してみせた。聴衆から漏れ出た感嘆の噪音と、嬉々とした朗読の響きが会場を包んだ。

茶話会では7名の女子と3名の男子が、粗菓を茶の子に頬張りつつ将来の夢を聞かせてくれた。国境なき医師団の一員として病める人々を癒したい。国連職員になって世界平和の実現に寄与したい。どんな人為的分界にも行く手を阻ませない軽やかな越境者になりたい。そんな宣誓めいた語りからほとばしる若さ。逞しさ。瑞々しさ。その弾ける震動を右から左から鼓膜で確かに捉えながら喫す珈琲の味は格別だった。

(英文学科准教授 中村 昌弘)



茶話会

子どものためのクリスマス・コンサート

(子どものためのコンサート・シリーズ第45回)

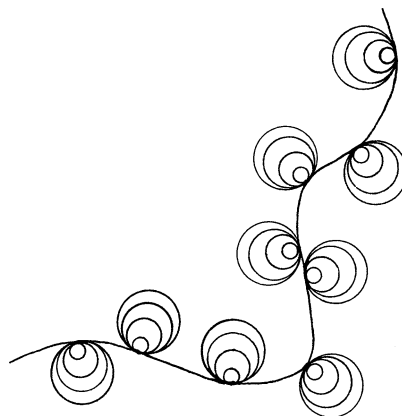
「子どものためのクリスマス・コンサート～音楽からの贈り物～」(子どものためのコンサート・シリーズ第45回)を12月10日(土)に講堂で開催しました(11時と15時半の2回公演、来場者計782名)。

出演は「音楽によるアウトリーチ」第1期生の内藤雪子(ピアノ)を中心に、北野真理子(ピアノ)、田中奈津紀(ピアノ、同2期生)、清水裕子(声楽)、米澤明日香(声楽)、土井美佳(ヴァイオリン)の6名です。

チェレスタによる〈きよしこのよる〉とピアノ連弾によるオッフエンバック《天国と地獄》序曲とで開幕し、ソプラノ独唱によるリスト〈愛の歌〉を挟んで、再びピアノ連弾でブラームス〈ハンガリー舞曲〉第5番とコンプトン〈チョップスティック変奏曲〉を軽快に演奏。ヴァイオリンが会場後方から登場してモンティ〈チャールダッシュ〉で客席を惹き付けた後、会場と一緒に〈赤鼻のトナカイ〉を歌いました。アンダーソン〈タイプライター〉を見事なピアノ連弾で披露して子どもたちは釘付けです。〈アメージング・グレイス〉とロッシーニ〈猫の二重唱〉に続いて、アンダーソン〈そりすべり〉、〈オー・ホーリーナイト〉、〈クリスマス・パーティー・メドレー〉と次第に編成が大きくなって盛り上がりました。クリスマスのお話を影絵入りで挟んで、神戸女学院らしいコンサートとなりました。

終演後には楽器体験コーナー(ヴァイオリン、オルガン、ピアノ、トーンチャイム、歌)に長蛇の列ができて賑わいました。

(音楽学部アウトリーチ・センター長 津上 智実)



〈クリスマス・パーティー・メドレー〉を奏でる出演者6人

前進を続ける国 ポーランド

KOBAYASHI Shizuka (環境・バイオサイエンス学科), ITO Yoshiko, SAKAI Rio (総合文化学科), ISAKAI Yuko, ISHIKAWA Sae, OTAKARA Yukari, MANABE Yuria, NAKAI Rika, NAGARE Atsuko, TAKEYAMA Momoyo, TERADA Sari, TSUJI Hiroko (英文学科) KSINIENIEWICZ Monika, TSUDA Yolanda (担当教員), SAKURAGI Sachiko (Research Room)

ポーランドは、西はドイツと接し、東は、かつてソビエト連邦と呼ばれロシアの支配下にあった国々と接する「中央ヨーロッパ」という位置関係から、古来幾度も他国の支配にさらされ、一時は国家としての存在すら否定されたこともあり、移民の流入・流出ともに盛んな地域にあります。この地を選んでやってきた人が多いためか、国民は愛国心に富み、繰り返し権力支配からの蜂起・自主自立国家の設立が実行され、大義実現の為に小犠牲をものともせずに関へ進む、自立した人々の積極的な参加によって形作られた国であると感じました。

今回のフィールドスタディーは、2016年8月1日～14日まで実施され12名の学生が参加しました。北はバルト海沿岸のグダニスクから、ワルシャワ、近郊のウッチ、南はチェコ・スロバキア国境近くのオボレ・クラクフまでポーランドを縦断しました。移動を除く実質12日間に、ミュージアム他13か所を訪問し、3つの大学でワークショップ、日本領事館訪問やオボレ副市長との会談（現地の新聞でも報道されました）という強行スケジュールでしたが、事故なく病欠もなく全学生が全行程参加することができました。ワルシャワでのホームステイを始め、全行程にわたって多くの人との出会いやサポートがあり「人が人を作る」「人脈は宝」だとあらためて感じる実り多い経験となりました。

今回のテーマである移民と難民については、移民ミュージアムでのアメリカ移出の記録や、移入したユダヤ民族の歴史を紹介するPOLIN、移入した人々を迫害し虐殺したアウシュビッツなど各所で学びました。民族、国籍、宗教、文化で人々が分類され、激しい格差と差別に伴う多くのいがみ合い・戦い・死の歴史があった過去を、現地でダイレクトに体感したことで、今やヨーロッパだけでなく、世界的なスケールで起きている移民・難民問題に深い関心を持ち、危機的な意識が芽生えました。今回のフィールドスタディーでの貴重な経験が、これから世界市民の一員という自覚を持って行動する大きなきっかけとなりました。

今回訪問したミュージアム13か所は総じて、自国の歴史を正面から見据え、記録を残し後世に伝えることに観点を置いて作られていました。ホロコーストの現場アウシュビッツビルケナウ収容所には、もう二度と繰り返してはならない人類の過ちを心に留めようと、世界中から多くの人々が日々訪れています。そこでは、胸を突き刺されるような悲しい衝撃を幾度も受けました。全世界の人々が決して忘れてはならない、背負っていかなければならない歴史、負の遺産を、最も学ぶべき場所で学び、感じ、平和を祈ることができたことは、今回のフィールドスタディーで最も貴重な体験でした。

内容の濃い講義、施設の見学・視察活動を通して、ただ単に知識を得るだけでなく、差別を撤廃する必要性、平和への願い、そして命の尊さを肌で感じ、より主体的に考えることができるようになったと感じています。

最後に、この素晴らしいフィールドスタディーを可能にくださったすべての方々に感謝の意を捧げたいと思います。本当にありがとうございました。



ポーランド人ホームステイファミリーとの交流会



アウシュビッツ訪問

2016年度音楽学部定期演奏会報告〈12/2〉

2016年度の音楽学部定期演奏会は、12月2日(金)午後6時30分より兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホールに於いて行われました。今年度の定期演奏会は、ある意味節目となったのではないのでしょうか？本学伝統行事である4年に一度のヘンデル作曲「メサイア」の年でもあり、昨年度末に25年勤め定年を迎えられた中村健先生指揮の時代が終わって、クリスマス礼拝も含めて新任松浦修専任講師の指揮へと変わるという、新しい時代の到来を記念すべき定期演奏会であったように思います。

例年専攻学生だけではメンバーの足りない本学部オーケストラは、非常勤講師、オーケストラ要員などプロとして一線で活躍しているメンバーに助けていただいておりますが、本学卒業生も多く、学生のためのオーケストラに比べると、その質も高いと自負しております。近年の傾向として、学生の中に音楽学部ピアノ専攻の学生がコントラバスを弾いていたり、人間科学部の学生がチェロを弾いていたりすることも、本学のリベラルアーツ&サイエンス教育の象徴として胸を張れることでしょう。ソリストとして、ソプラノの斉藤言子先生(本学学長)、アルト山田愛子先生(本学非常勤講師)、テノール松本薫平先生(本学准教授)、バリトン萩原寛明先生(本学非常勤講師)、合唱指導には山口英樹先生(本学非常勤講師)、オルガンやチェンバロには広く活躍されている優秀な本学卒業生、そして男性合唱はボランティアで参加してくださった男性100数名の皆様にも6回も本学に出向いていただき練習に加わっていただきました。この中には、森孝一院長、飯謙学生部長を始めとする他学科の先生方も含まれており、ステージの裏には全音楽学部教職員がメサイアを支えるという、まさに神戸女学院一丸となった演奏会とも言えるでしょう。

実際の演奏会は、1000人に迫るお客様にご来聴いただき、盛大な拍手をいただきました。松浦先生のメサイアは、「正統的な演奏の中に若き情熱のほとばしりを感じる名演であった。」とのお褒めの言葉を各方面から頂戴し、大成功を取めたと思います。

大学チャプレン中野敬一先生に書いていただいた曲目解説によれば、「メサイア」とは「救い主」であって、この作品では、ポイントを絞った聖句で示しつつ、聴衆にあなたの「救い主」を心に描くことが許されている、と記されていました。学生たちは春から合唱の授業をすべて使って準備します。4年間の在学中に全員一度は歌うこのメサイア。歴代の卒業生たちは、この経験を一生の思い出として、それぞれの「救い主」として残していることでしょう。定期演奏会のためにご尽力くださったすべての皆様に心からのお礼を申し上げますとともに、この良き伝統が永遠に続くことを祈りつつご報告させていただきます。

(音楽学科長 田中 修二)



音楽学部定期演奏会 ヘンデル作曲「メサイア」

第8回舞踊専攻卒業公演

去る12月7日から10日に、本学エミリーブラウン館の舞踊専攻スタジオにて、第8回音楽学部音楽学科舞踊専攻卒業公演が行われました。公演1作品目は、専任教授、島崎が第5期生に振り付けをしたFrom dusk to dawnの再演で幕を開けました。元々8名に振り付けをした作品でしたが今年度の4年生は9名でしたので、かなり手直しをしての上演になりましたため、新たな作品として蘇ったと思います。その後は休憩を挟んで、非常勤講師の鞍掛先生振り付けによる、goyという作品と客員教授のオーウェン先生による、Roomsという作品がそれぞれ上演されました。goyは音楽、振り付け共にどこかエスニックな雰囲気を持った作品でした。一方でRoomsはそれぞれの学生が想像した部屋をモチーフに創られた、どこか日本的な雰囲気を持つ作品でした。そしてもう一度休憩を挟んで、最後に島崎振り付けによる、Southで幕を閉じました。Southは、10月に台湾で行われた、Kuandu Arts Festivalへの招待を受けて創られた作品で、その時は、ゲストの男性ダンサーが3名混ざっていたため、今回の卒業公演のために女性のみバージョンに変えてのご披露となりました。かなり体力的に負担のかかる作品でしたが、非常勤講師の本間先生と研修生の服部さんの指導もあり、台湾公演の時に比べてもかなりレベルアップされ、群舞の難しさも克服されていたと同時に、それぞれの個性が表現として垣間見れたことが大きな収穫でした。

(音楽学部教授 島崎 徹)



作品名：South

「みんなでつくるクリスマス ～せっかちサンタの贈りもの～」を通じて

文学部 総合文化学科 3年生

12月17日、キャリアデザインプログラムのアートマネジメント・コースに所属する学生主催のイベントが開かれました。第一部は子供向けのクリスマスカード作り、第二部はどの世代の方でも楽しめるコンサートで、多くの方に来場していただきました。

後期が始まってすぐに準備に取り掛かり、試行錯誤をくり返しながら計画を練っていきました。二部構成にすることが決まると、コンサートの出演を誰にお願いするのか、会場の飾りつけはどのようにすればいいのか、本格的に動き出すための準備が始まります。出演依頼や宣伝のお願いは、普段経験することのない貴重な経験でした。特に宣伝はイベントを左右する重要な仕事で、配るチラシの一枚一枚に重さを感じました。

イベントを通じて私が学んだことは、やはりチームワークの大切さです。一人でできることは限られていても、助け合う仲間がいれば解決できました。お互いの苦手な部分を補うことで、チームでのベストを尽くせたと思います。

当日は本当に人が来てくださるかとても不安でした。けれどそれも杞憂に終わり、90人以上の方々が来場してくださいました。無事終了した時、「ありがとう、楽しかったよ」と多くの方におっしゃっていただけて、この一言のために努力してきたのだと強く実感しました。私たちに貴重な体験をさせてくださった上念先生、快く協力してくださった甲東ホールの方々、全ての方々に感謝を述べたいと思います。



みんなでサンタダンス

環境・バイオサイエンス学科3年生西山春佳さんが、 日本理科教育学会近畿支部大会で口頭発表しました

2016年11月26日、大阪教育大学柏原キャンパスで平成28年度日本理科教育学会近畿支部大会が開催されました。このたび、環境・バイオサイエンス学科3年生の西山春佳さんが、「チャコウラナメクジを用いた忌避行動に関する一考察—銅(II)イオンの忌避性を利用した高校生物教材への応用—」という研究発表を行いました(西山・中川, 平成28年度日本理科教育学会近畿支部大会発表論文集, C-16, 60頁)。

ナメクジが銅(II)イオン Cu^{2+} を忌避する性質は、すでに報告されています。しかし、忌避行動に対する Cu^{2+} の濃度依存性については、詳細な報告がありません。そこで、濃度の異なる3種類の硫酸銅(II)水溶液(100, 10および1 mmol/L)を用いて、比較的採集しやすいチャコウラナメクジの忌避行動について検討しました。

チャコウラナメクジの忌避行動には、(1) 頭部を持ち上げる、(2) 触角をひっこめる、(3) 腹部を浮かせる、の3種類あることが判明しました。そして、水溶液の濃度の相違による忌避行動の相違が認められ、1 mmol/L という希薄水溶液に対しても、忌避行動を示すことが明らかになりました。

今回の研究成果は、生態学的にも興味深く、高校生物や理科課題研究の授業教材としての活用が期待されます。

(環境・バイオサイエンス学科教授 中川 徹夫)



日本理科教育学会近畿支部大会で発表する西山春佳さん

中庭で発見されたワスレナグモ

「地面に穴が開いていて、中にクモの姿が見えるのですが、何というクモでしょうか？」環境・バイオサイエンス学科の専門科目生態学実習Ⅱの授業で、学生が質問にやってきた。この実習では、グループに分かれた学生たちが、それぞれ自主的に生態学的なテーマとその調査方法を考え、調査を行い、その成果を発表する。学生たちは、ヴォーリズの構想のもとキャンパスの中心に据えられた中庭の一角が生きものを支える場所としてどのように働いているかを調べようと取り組んで、巣穴に行きあたったのである。学生とともに掘り返して調べてみると、クモはワスレナグモという準絶滅危惧種だった。今まで中庭を舞台に大学祭や卒業式の茶話会が行われ、大勢が歩きまわっていたにもかかわらず、誰一人(私も含めて)足もとの小さな穴に関心を払った人間はいなかった。いや、穴に気づいた人はいるかもしれないが、それが何者であるか知りたいと強く思った人間がいなかったということだろう。

ワスレナグモは、本学にも生息するジグモやキシノウエトタテグモとともにトタテグモ下目に属している。同じクモといっても、そのへんで走りまわったり網を張ったりしている新参者のクモと違って、およそ2億5千万年前からの、すじがね入りの地中生活者である。したたかではあるが、地表の急激な変化にはついていけない。私たちにできるのは、彼らの静かな生活を見守ることである。

(環境・バイオサイエンス学科教授 遠藤 知二)



左：クモの巣穴、右：見つかったワスレナグモ

2016年度 卒業論文題名

文学部 英文学科

文学部 総合文化学科

2016年度 博士・修士論文題名

文学研究科

2016年度 音楽学部卒業演奏会演奏曲目

2016年度 音楽研究科修士公開試験曲目

2016年度 卒業論文題名

人間科学部 心理・行動科学科

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科

2016年度 修士論文題名

人間科学研究科

個人情報保護のため、25ページ目から
45ページ目は削除しています。

＜先輩からのメッセージ＞

在学生の皆様へ

宮本 由紀子

(文学部総合文化学科卒業)

私は卒業後、2009年4月から株式会社竹中工務店に勤務しています。入社後4年間は総務部に所属し、社内外の窓口として総務業務全般を担当しました。その後は、役員秘書業務及び複数の作業所事務業務を経験し、現在は、読売テレビ新社屋新築工事作業所に所属しており、作業所事務を担当しています。業務内容は、作業所運営に関わる業務全般で、来客対応・電話対応・備品管理・見積書作成・契約書作成・請求書処理・諸官庁提出書類作成・会議資料作成等々、多岐に渡っており大変なことも多いですが、1つのプロジェクトが完成するまでには、大勢の方々が携わっており、社内外での人との出会いがとても多くて魅力的です。社内には、設計・構造・建築・設備・営業・事務等々、多くの職種があり様々な知識や考え方に触れることができ、日々多くの刺激を受けております。

作業所事務業務は、直接工事現場に出向くことはありませんが、工事担当や職人の方々から快適かつ円滑に業務を遂行できるよう、縁の下の力持ちとして日々全うしております。

これから就職活動をされる学生の皆様、不安でいっぱいと思いますが、悔いのないよう少しでも気になる会社があれば、冊子やHP等の情報収集だけでなく、OG訪問等で社員と接する機会を設け、それぞれの会社の良さを感じ取ってほしいと思います。きっと、皆様方に合う素敵な会社に出会えるでしょう。



作業所事務所にて

今こそ女性が輝く時代です！

川上 万里奈

(文学部英文学科卒業)

私は2012年に英文学科を卒業して、㈱ジュピターテレコムに入社しました。

最初の3年間は、宝塚川西局に在籍しBtoCの営業をしたり、ケーブルテレビのローカル番組のコーナーで自ら取材した地元の話題を紹介したりしておりました。

その後、東京本社に転勤となりキャラクター「ごっくう」のグッズの企画・制作、POP・チラシ・ポスター等の制作をして現在に至っております。

今所属している部署は女性12人、男性1人で構成されていますが、3人が産休中、1人が時短勤務者です。子育てと仕事を両立している先輩がいる環境は、これから結婚や出産を希望する私たち社員にはとても励みになっています。

東京に来てからも、同じように東京で仕事をしている神戸女学院時代の友人と今でも毎週末のように会って話をしていますが、子どもができて何らかの形で雇用が保証される職場が多いように思います。

神戸女学院では、先輩がたのお話を伺う機会をたくさん設けていただき、学生生活支援センターやキャリアセンターの方々にも折にふれて相談にのっていただいたりしました。

私は、就活期間というのは新卒というパスポートを手には様々な会社を訪問できる特別な期間だと思って、最初はあらゆる企業に目を向けその中から自分に合うと思われる会社に入社しました。

氾濫する情報から自分にあった道を選ぶのはとても大変なことだと思いますが、一人で悩まずキャリアセンターや学生生活支援センターのスタッフの方々、先輩の話聞いてこっだ！と思える会社を見つけてください。応援しています。



制作会社の方とのグッズ制作打合せ風景

2017年度大学入試結果中間報告 (2/6現在)

2017年度入試において本学は受験生に注目されるような大きな制度変更もなく、各種模試データにおける本学志望動向からも苦戦が予想されていました。更に、指定校推薦等年内入試の志願者も昨年度よりも減少という非常に厳しい流れの中で一般入試を迎えました。

一般前期日程の結果は、極めて厳しいものです。特にA日程は3科目型・2科目型ともに志願者数合計が前年度比10%以上減少、特に英文学科は今年度入試において、他大学では外国語・国際系統の学科志願者の増加傾向があるにも関わらず、20%以上の減少となりました。本学では、学内併願をする受験生は英文学科を第一希望とする傾向が強いため、今回の数字が他学科にもマイナスの影響を及ぼす可能性大です。次年度に向けて、英文学科「言語コミュニケーションコース」「グローバル・スタディーズコース」「通訳・翻訳プログラム」等の情報を高校教員・受験生・保護者等に的確に周知するための方策を可及的速やかに実施する必要があります。

結局、前期日程(A・B・C・D)総志願者数は2,115名と昨年度より6%減少しました。学科ごとの内訳では、英文学科は499名(前年比83%)、総合文化学科は802名(同比95%)、音楽学科は24名(同比109%)、心理・行動科学科は493名(同比101%)、

環境・バイオサイエンス学科は297名(同比103%)と、文学部に厳しい数字となりました。これは入学者を確保するうえで大学全体にも大きく影響を及ぼす虞があります。

前期 AB 日程は1月27日～29日に学内外7会場で実施し、2月6日に692名の合格者を発表しました。また、一般入試 CD 日程は2月14日、後期日程は3月7日に、いずれも文学部・人間科学部で実施され、合格発表はそれぞれ2月21日、3月15日の予定です。「大学入試センター試験を利用する入試」も前期・後期それぞれの日程で実施されます。

志願者数のみが入学者の質を決定するものではありませんが、やはり一定数以上の志願者の中から入学者を選抜することが、入学後の学修・生活指導、さらには就職等多くの観点からも望ましいものであることは言を俟ちません。本学が創立以来142年にわたって堅持してきた「キリスト教・国際理解・リベラルアーツ」という教育の根幹を正しく次世代の担い手へと継承していくためには学院が一丸となってこの難局に対峙する必要性を感じています。引き続き皆さまの力強いご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(入学センター課長)



<派遣留学報告>

ミリアム大学

ミリアム大学での貴重な経験

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 2年生

私は、昨年8月から12月までの約5か月間フィリピンのミリアム大学に派遣留学させていただきました。

1回生の頃から、国際交流プログラムや留学生バディを通して留学生と接していく中で、私も留学してみたいという思いが強くなりました。ミリアム大学は、女子大学で少人数制をとっている大学なので、現地の学生さんの中に埋もれることなく、積極的に授業に参加できるのではないかと思います。またマニラの郊外にあるので、実際に身を置くことで、フィリピンの様々な情勢を知り、多角的な視野を身につけられるのではないかと思います。この留学に挑戦しました。

ミリアム大学では、自身の専攻であるバイオサイエンスに加えて発展途上国の問題解決について考える授業など、ミリアム大学ならではの授業も履修しました。授業は全て英語で行われ、課題が与えられることも多かったのですが、留学当初は授業についていくのが大変でした。また、留学中はミリアム大学内の寮で生活していましたが、日本との生活習慣の違いに戸惑う部分も多々ありました。しかし、大学の友達をはじめ、私たちの留学をサポートしてくださった方々は親切な方が多く、その方々のおかげで約5か月間の留学生活を楽しく、充実したものにすることができました。

この留学を通して、英語運用能力やバイオサイエンスの知識が身についたことはもちろんのこと、世界に視野を向けて社会問題を考える力が養われました。また、ストリートチルドレンやホームレスが至る所にいて物乞いしてくるフィリピンの現状を目の当たりにして、自身の日本での生活がどれだけ幸せなところなのか、ということを実感しました。

最後にこの派遣留学を通して出会ったすべての方に感謝します。本当にありがとうございました。



最後の授業にて

アサンブション大学

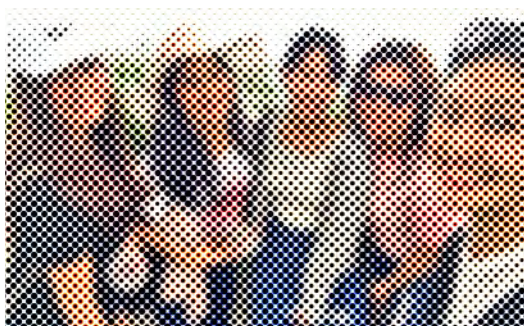
フィリピンでの学び

文学部 英文学科 2年生

フィリピンの大都会、マニラにあるアサンブション大学での留学生活は、私にとって試練の連続でした。生徒40人が一部屋で暮らす共同生活、慣れない現地語のタガログ語、3時間の英語での授業など、私の半年間はどこを切り取っても大変なことばかりでした。

しかしその試練は、私の一生の財産になったと言えます。まず、自分の勉強に対する意識を大きく変化させました。共同生活をしていた友人たちは、真剣に勉学に取り組んでいました。学校に行くこともままならない子どもが大勢いるフィリピンに身を置く彼女たちは、自分たちがどれほど恵まれた生活をしているか、きちんと理解していました。その彼女たちの頑張りに触れ、私は自分の学校生活を見直そうと思いました。また、彼女たちは自分自身の将来に大きな希望を持っていました。授業で企業家になりたいかと聞かれた時、クラスメートの半数以上が手を挙げていました。自分が努力すれば、家族を豊かにすることができるから、と語る彼女たちの目は、キラキラしていました。周りにいた生徒たちに限らず、フィリピンという国の人は皆、毎日熱意を持って生きているように感じました。そんな目には見えない勢いに触れたフィリピンでの経験は、留学期間中の私を励まし、そしてこれからの私の挑戦を後押ししてくれると思っています。

そして今思うことは、自分の選択の正解を信じて、怖くても自分の思う通りに進もうということです。何をするにもリスクを先に考えがちだった私が初めて自分で選び、挑んだアサンブション大学への留学は、そんな強い意気込みを私にくれました。この想いを、これからの本学での学びに生かしていきたいと思います。このような機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



友人たちとマニラ近郊にて

梨花女子大学

留学を通して

文学部 総合文化学科 3 年生

私は2016年3月から12月韓国の梨花女子大学に交換留学生として留学していました。約11か月間の留学生活は私にとってなにもものにも代え難いとても大切な経験と思い出になりました。はじめは知人が一人もいない国で生活することに緊張していましたが、それよりも新しい生活への期待が大きかったです。実際学校が始まると友人もでき、さまざまなところに足を運び充実した日々を送ることができました。勉強の面でも生活の面でも常にまわりから刺激を受けていたため日本に帰りたいと考えたことは一度もありませんでした。しかし語学力が思ったように伸びなかったり、急に孤独や虚無感を感じたり、しんどい時期もありました。留学を経験した人にしか分からない辛さは家族にも理解してもらえず一人で悩んだ時もありました。しかしその度同じ留学生の友人や留学を経験したことがある韓国人の友人に励まされ前を向くことができました。

この11か月を通して多くのことを知り、経験し、学びました。それは学業や語学だけでなく、生活、文化、遊び、感情や感覚など言い出したらきりがありませんが、これはすべて韓国留学をしなければ得られなかったもので、この貴重な経験をこれからも大切にしていきたいです。また、韓国でできた友人も私にとって本当にかげがえのない人たちです。外国人で語学も完璧に話せない私を遊びに誘ってくれたり、日本に帰らないでと言ってくれたり、国籍に関係なくこれほど仲良くしてくれた友人たちはつらい時しんどい時いつも助けてくれました。日本に帰った今でもよく連絡をしてくれて自分が留学に行ったらこれほど素敵な友人たちに出会えたのは本当に幸せなことだし、恵まれていたなと思います。

留学は終わりましたが、この経験や感覚を忘れず、これからの学生生活に生かしていけるよう努力したいと思います。



クラスの親しい友人と二次会

<認定留学報告>

モンタナ大学

充実したモンタナでの日々

文学部 英文学科 3 年生

私はモンタナ大学において、2015年8月より約9か月間、認定留学をいたしました。日本語が通じない国に行き、異国文化交流を通じて自分の語学力を鍛えたいと思ったので留学を決めました。モンタナ大学は、州立大学としては比較的小規模な大学ですが、教授と学生の距離が近いところが魅力でした。授業で分からないところがあっても、気軽に質問できたので、勉強で大きな壁にはぶつかりませんでした。しかし、他学生と比べて、明らかに私の授業理解度は低いと感じていたため、放課後は図書館で復習を徹底的にしました。図書館が夜中の2時まで開いていたので、テスト前はよく遅くまで勉強していました。そのかいもあり、最終成績は非常に良い結果を残すことができました。週末はジムに通ったり、買い物をして息抜きをしていました。中でも、ハイキングが一番の楽しみでした。片道2時間近くかけて頂上まで登ったこともあります。長い道のりですが、登りきった後はとてつもない達成感を味わいました。モンタナは自然が豊かなので、ハイキングするたびに、自然の美しさに感動を覚えました。また、留学期間中は、2名1室の寮生活を送りました。ルームメイトとは今でも頻繁に連絡を取り合うほど仲が良いです。彼女の実家が、大学から車で2時間ほど離れたところにあったので、休日によく一緒に帰省していました。とても明るくて優しいご家族で、私のことも家族の一員のように接してくださいました。クリスマスの朝、ツリーの下に「To Chiharu」と書かれているたくさんのプレゼントを見たあの感動は、決して忘れることはないでしょう。留学を通して、改めて周りの人々への感謝の気持ちが強くなりました。充実した生活を送れるのは周りの人の支えがあるからこそだと気づかされました。留学で得たご縁をこれからも大切にしていきたいです。



これは大学の中心にある Oval と呼ばれる芝生広場で、ヨガをしている写真です。晴れた日は友達とここでよく過ごしていました。

<受入れ留学生報告>

Kobe College

ロックフォード大学交換留学生

Kobe College was an extremely interesting experience for me as an exchange student from the United States of America. I was only able to attend the college for a short time, however, I was able to have a lot of fun and make many interesting memories during my stay in the country. I met many people during my stay at the college, and all of them were extremely nice to me even though I was unable to speak much Japanese. The experience was very interesting and the classes that I was able to participate in were interesting to listen to. The school was able to provide information for me, and I was able to make informed decisions during my stay in Japan. More than anything, the time that I spent in the E-Zone was the most enjoyable, especially when new students would come in. It was fun to play games with the other students and make friends. Even though it was hard for us to communicate, it was entertaining to try to understand each other, even when it was frustrating. Overall, I very much enjoyed the time that I was able to spend in Japan and I was able to learn many different things about the culture and language that I was unaware of before. I was extremely happy to have the opportunity to attend Kobe College.



E-zone Farewell Party

吾唯知足の教え

徳成女子大学交換留学生

半年間の留学生生活を顧みれば生まれて初めて挑戦したことが多かったのです。海外に来たこと、学生寮に住んだこと、日本の友だちができたこと、日本の大学で授業を受けたことなど全部初めて経験したことでした。これらは私にとって大きな挑戦でしたが、実は今までやってきたことを「挑戦」のように大げさに表現したくないです。ただ心に引かれたことを少しずつ行動に移すだけでした。

留学で日本に来る前には神戸女学院大学でたくさん学べるのが楽しみでした。実際に多くのことを学ぶことができたので嬉しいです。しかし、同時に留学中、自分のことについて悩みもありました。例えば、新しいところに来て、性格が内省的なのはどうすれば人々に近づけるのか、日本に来たので頑張って色々なことを経験すべきなのにどうすればいいのかといった悩みでした。

そのような中、私の慰めになった言葉があります。それが「吾唯知足」、われはただ足ることを知るという意味です。京都の龍安寺の茶室の前にあるつくばいに書かれている言葉だそうです。この言葉は授業のレポートを書いていた間に知るようになりました。この言葉は人間の不完全さを知り、自分のことに満足することを教えてくれています。自分の悩みはすべてを完璧にしなければならないという不安やプレッシャーからきているのかもしれないと気付きました。それで私も不安やプレッシャーを捨てて、できることから少しずつ始めようと思いました。

考えてみれば日本語の勉強を始めたときも同じ不安を抱いていました。はたして日本語で会話ができるか、日本で留学ができるかという不安でした。しかし、やるしかないという気持ちで一歩一歩勉強して、最終的に神戸女学院大学で半年間の留学ができました。帰国後も「吾唯知足」の教えを忘れずに生きてゆきたいと思います。



学生寮から眺めた月

研究所活動報告

留学生活について

徳成女子大学交換留学生

韓国から日本に来て、あっという間に時間が経ってしまいました。そして私の留学生活もうもう終わりになりそうです。日本の神戸女学院に来ていろいろな人と出会って、豊富な体験をすることができたので本当によかったと思います。半年と短い時間でしたが、今までの私の留学生活について書いてみようかなと思います。

夏には、日本に来たばかりで、皆と初めて挨拶をしたり、歓迎会をしたりしました。神戸女学院にはバディというプログラムがあって、留学生はバディに日本での生活についていろいろ助けてもらえ、一緒に遊びにも行きました。また、学校から参加する行事があり、留学生とバディが皆西宮神社の祭りに参加しました。その時お神輿を運んだのはすごく大変でしたが、今振り返ってみると日本の祭りを体験することができたと思うので、良い思い出として残りました。

ある程度留学生活に慣れてくるに従って、他の留学生たちと学生寮で一緒にたこ焼きパーティーや鍋パーティーもしました。中国、韓国、アメリカなど、それぞれの各国の料理を作って一緒に食べながら遊んだことは、ここでしかできなかった貴重な経験でした。しかも、誰からの強制ではなく自分たちで行ったので、特別な経験でした。

秋になったら、天気も良くなって、いろいろなところへ遊びに行きました。京都、奈良、USJ などです。神戸女学院は位置的に神戸と大阪の間にあって、交通が便利です。だから関西地域のどこでも行けます。着物を着て京都に行ったこと、紅葉をみに遊びに行ったこと、ハロウィンパーティーに行ったことなど。この頃に一番関西地方の観光をしに行きました。

冬になると、クリスマスと年末の雰囲気があって町がすごくきれいになります。神戸はルミナリエのイベントもあってこれも見どころです。私は冬をもっと楽しむため、友達と一緒に北海道にも行ってきました。関西では見られない風景とそこでしか食べられないものをいっぱい楽しみました。そして学期の終わり頃には、留学生の皆と一緒に小学校にボランティアしに行きました。皆自分の国の紹介をして、英語の授業を手伝いました。子どもたちのボランティアなんて初めてだったので、すごく緊張しましたが、子どもたちにも引く張ってもらって、とても面白かったです。

もう韓国に帰国しますが、ここで作った思い出は心に大事に抱きしめたいと思います。良い思い出を作ってくれた友たちに感謝します。半年間ありがとうございました。



観光で訪れた奈良にて

◇講演会

・前期：2016年6月17日

「子どもの交通安全教育～安全に楽しく自転車を利用できる社会の実現に向けて～」

矢野 円都 心理・行動科学科准教授

・後期：2016年10月14日

「インフラの仕事と女性の視点」

地方共同法人 日本下水道事業団

事業統括部計画課長 阿部 千雅氏

◇研究所総会研究発表

・前期：2016年6月24日

「プラトンにおける勇気について」

高橋 雅人 総合文化学科教授

プラトンの対話篇と呼ばれる著作において、初期の『ラケス』や『プロタゴラス』から、中期の『国家』、後期のかつ最晩年の作品である『法律』に至るまで、勇気は一つの重要なテーマであった。勇気が徳の中でも重視されることは、古代ギリシアが戦争の絶えない社会であり、あるポリスが負けた場合そのポリスの成年男性は皆殺害され、女性と子どもは奴隷とされることもあったことを考えれば、理解できることである。しかし、欲望や快楽に抵抗することも勇気の発露だと上に記した対話篇で主張される時、それは節制の働きではないのかという問が生じる。また、この問に肯定の答を与える一節がプラトンの『法律』にあることは、その記述が不整合を来しているのではないのかという疑念を引き起こす。

後者の疑念は『法律』の対話を丁寧に読むことで解消する。欲望や快楽に抵抗するのは勇気であると主張するのは、対話篇登場人物のクレテ人クレニアスとスパルタ人メギロスであるのに対して、節制であるとするのはプラトンの代弁者と目されるアテナイからの客人だからである。

では最晩年におけるこの変化は何を意味するのだろうか。クレテとスパルタという名にし負う軍事国家出身の二人は戦争の勝利を国家にとっての最善と考えるが、これは「己に克つこと」こそあらゆる勝利の根本であり、勇気であるという把握に支えられている。アテナイからの客人の批判はまさにここに向かう。なぜなら、国家においても個人の心においても内部分裂こそ避けなければならない悪だからである。そのような悪に陥らないためには、音楽と体

育を基盤にしてなされる知を中心とした教育によって理を身につけなければならないとプラトンは説く。

このような教育によって我々は本当に勇気ある人となるのか。そもそも欲望や快楽に抵抗するのは勇気なのか節制なのか。考えるべきことはまだ多い。

・後期：2016年12月2日

“Catastrophe’s Catastrophe”

Corey WAKELING 英文学科専任講師

1978 is a political point in modernist aesthetic inquiry. Samuel Beckett dedicates a poem to Herbert Marcuse. Giorgio Agamben publishes *Infancy and History*. Václav Havel publishes *The Power of the Powerless*. I argue that Beckett’s late play dedicated to Havel, *Catastrophe* (1982), stages the central concerns of this convergence. Beckett’s negation of the possibility of hope within the frame of the spectacle at the same time stages hope of a “spectre of dissent” (Havel) in the gaze of lead character, Protagonist. Reassessing Agamben’s theories of gesture and infancy as provinces anterior to language suggest the play speculates upon what Agamben calls an “unpresupposable community”.

◇専門部会研究発表会

1. 音楽学科

2016年6月8日

「指揮者の内面

～ベルリオーズ『幻想交響曲』を通して～」

松浦 修 専任講師

2. 英文学科

2016年6月21日

“Translation Is the Child: Theorizing

Translation through Travel Poems”

古村 敏明 准教授

3. 環境・バイオサイエンス学科

2016年7月1日

「岡田山キャンパスにおけるカラスの生態」

野寄 玲児 教授

4. 総合文化学科

2016年7月5日

「メディアイメージと女性作家」

笹尾 佳代 准教授

5. 総合文化学科

2016年10月26日

「志怪の書を読み解く：

岡本綺堂『中国怪奇小説集』訳語の検討から出発して」

小林 隆道 専任講師

6. 音楽学科

2016年11月9日

「ロベルト・シューマンの作品に見られる二面性

～フロレスタンとオイゼビウス～」

入谷 幸子 専任講師

7. 英文学科

2016年11月30日

“Investigating Northern Irish History”

David G. McCULLOUGH 教授

8. 心理・行動科学科

2016年12月22日

「大災害後の心理学的介入について」

Janine SHELBY 客員教授

◇専門研究会

2016年11月3日

“Sympathy and Human Contact in the Poetry of

Emily Dickinson”

Associate Professor, English Department,

American University Marianne Noble 氏

◇助成・補助

出版助成

4件

研究助成

7件

総合研究助成

4件

研究補助

1件

専門研究会補助

1件

専門部会研究発表会補助

8件

国際学会出張補助

6件

◇発行物

『論集』第63巻第1号（通巻第176号）2016年6月発行

『論集』第63巻第2号（通巻第177号）2016年12月発行

（研究所）

女性学インスティテュート活動報告

- ◇特別講演会 2016年4月22日
 「震災から5年、母子避難、福島から大阪へ
 ーふつうの暮らし 避難の権利 つかもう安心の未来ー」
 原発賠償関西訴訟原告団代表
 東日本大震災避難者の会 Thanks & Dream 代表
 森松 明希子 氏

◇連続セミナー テーマ「老いること 生きること」(全4回)

- 〈第1回〉2016年5月6日
 「障害のある人の自己決定とその支え方」
 與那嶺 司 総合文化学科准教授
- 〈第2回〉2016年5月13日
 「生きてるよろこび、そして豊かな老いへ
 ー発達に障がいのある青年たちとの34年の
 音楽活動から学んだことー」
 水本 誠一 心理・行動科学科准教授
- 〈第3回〉2016年5月20日
 「老いを支える医療と保健：その光と影」
 横田 恵子 総合文化学科教授
- 〈第4回〉2016年5月27日
 「『終活』ブームの背景と課題
 ー特に葬儀や墓に関する問題をめぐってー」
 中野 敬一 総合文化学科教授

◇講演会 「みんなで考えよう、女性学の未来」プロジェクト

- ・2016年7月7日
 “Impact of the Recommendations of the United Nations Convention on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women (CEDAW) on Gender Equality in Japan and Poland: Article 7 on Political Representation”
 Monika KSIENIEWICZ 英文学科客員専任講師

- ・2016年9月30日
 「人々はなぜジェンダー格差を受け入れているのか」
 広島大学大学院教育学研究科教授 森永 康子 氏
- 「文学とジェンダー 知ることと感ずること」
 名古屋大学大学院文学研究科教授 飯田 祐子 氏

◇講演会 奈良女子大学との交流

- ・2017年1月24日
 「女性中心のマタニティケアを考えるーアジアの視点から」
 奈良女子大学
 アジア・ジェンダー文化学研究センター長
 研究院生活環境科学系
 生活環境学部生活文化学科教授 松岡 悦子 氏

◇学生懸賞論文(第18回女性学インスティテュート賞) 4編応募。 最優秀賞該当なし。優秀賞2編。

- ◇授業
 Cu134(1)(2)「女性学(実践編)」
 Cu234(1)(2)「女性学(理論編)」
 Cu235(1) 「ジェンダー・スタディーズ(Ⅰ)」

◇発行物 『女性学評論』第31号(2017年3月発行)

(女性学インスティテュート)

〈神戸女学院大学の企画による2017年度夏期語学研修参加者募集〉

2017年度の夏期語学研修は、次の4プログラムが実施予定です。詳細は4月作成予定の募集要項をご参照ください。また募集説明会を実施する予定です。日程は、決定次第、国際交流センター掲示板とK-CLIPで告知します。春期（2018年2月～3月）にも語学研修を予定しています。詳細は国際交流センター（デフォレスト館1階）まで。TEL：0798-51-8579 Email：kokusai@mail.kobe-c.ac.jp

第8回 西オーストラリア大学（豪州）

時期：2017年8月～9月 募集人数：20人 参加費用：約55万円

西オーストラリア州のパースにある自然豊かなキャンパスで、約4週間、総合的に英語を学ぶ。ホームステイ。平日、朝夕食事付き。

第2回 ケンブリッジ大学（英国）

時期：2017年8月～9月 募集人数：20人 参加費用：約85万円

ケンブリッジ大学にて約4週間の英語研修を受講する。午前中英語集中レッスン、午後はケンブリッジ大学生とのフィールドワーク。大学寮に滞在。全食事付き。

第9回 カリフォルニア大学アーバイン校（米国）

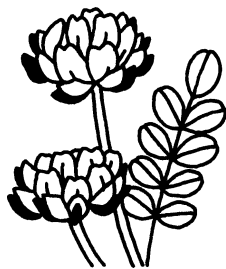
時期：2017年8月 募集人数：20人 参加費用：約75万円

他国の留学生と共に約4週間、基礎および応用英語を学ぶ。英語力によっては、ビジネス英語クラスを受講することも可能。ホームステイ。平日、朝夕食事付き。

第6回 ヨーク大学（カナダ）

時期：2017年8月 募集人数：20人 参加費用：約60万円

多文化都市トロントにあるカナダで3番目の規模を誇るヨーク大学にて、約4週間の英語研修を受講する。現地学生との交流や学外活動も含む。大学寮。



<私の研究>

私の研究

三浦 欽也



私は、学生の頃、人の思考を機械的に実現するということに夢を感じて、人工知能研究の道に進みましたが、「賢い」機械と、もともと興味を持っていた、「人間のように親しみやすい」機械の間に微妙なズレを感じ、それ以来、

人が人を「人間らしい」と感じるのはなぜかということが、私にとって大きなテーマになりました。

人が相手（誰かあるいは何か）を「人間らしい」と感じるのは、その相手が持つ属性（いわゆる「人間らしさ」）だけの問題ではなく、「感じる側」の「人間らしく感じる」しくみが大きくかかわっていると考えられます。

そのような観点から最近では、測定したり記号的に記述したりするのが難しい感覚を、心理学の統計的な手法を応用して捉えようとする、感性情報処理と呼ばれる分野に研究をシフトしてきました。

最近の研究の成果としては、「かわいい」という感覚に関するものがあります。この「かわいい」という感覚は、「人間らしさ」ともある程度の関連がありそうだということと、学生にも興味を持ってもらえそうだということで始めたものです。結果として、女子学生たちが「かわいい」と感じるものには、以下の3種類のものがあることが分かりました。一つめは、赤ちゃんや幼い生き物のかわいさと共通の「かわいさ」をもつもの、二つめは、服飾品などの、おしゃれなものや女性らしいもの、三つめは、その両方の属性を兼ね備えたものです。従来「かわいい」という感覚は、先の一つめのものに感じるとされてきましたが、近年では「かわいい」という語の多様化にともなって、おしゃれなものや女性らしいものにも使われるようになってきているところが興味深いところです。

(心理・行動科学科教授)

教育研究の環境整備 2

出口 弘



環境・バイオサイエンス学科に移ってからは書いていませんよね？と依頼されたので、前回の続き、2006年以降の仕事を振り返ってみたいと思います。

2006年は通訳・翻訳コースと現代 GP に資する環境とし

て、遠隔同時通訳システムを備えたマルチメディア教室を整備しました。現代 GP で開発された CD 教材 KC-ITS (Kobe College Interpreting Training System) を発展させた、通訳の自学自習システム KC-ES (Kobe College Education System) の共同開発にも携わりました。また、教室整備業者の東和エンジニアリングとの産学協同プロジェクトである遠隔同時通訳研究機構で2年間の共同研究を行いました。そこでのノウハウがその後の本学の国際化加速プログラムや ESD (Education for Sustainable Development)、音大連携の所謂 GP プロジェクト等に生かされ繋がっています。

ICT 基盤の整備としては、2007年に統合認証システムを導入し、2011年、2016年はパソコン教室、サーバー群とネットワークの同時更新を行い、キャンパスの無線化 (WiFi スポットの整備) も2016年度末の JD 館、音楽館等の整備をもって完了しました。合わせて導入した貸出用の iPad や自分のスマホ等も Web 認証して利用すれば、ICT を活用した学習が場所を選ばず可能となりました。また、遅れていた Single Sign-On (1 回の認証で複数のシステムが使える便利な仕組み) もサービス開始です。

システムリプレースの度に皆様にはご迷惑をお掛けして参りましたが、学院や皆様のご理解とご協力に感謝しております。新カリキュラムに合わせて環境を有効に活用することが今後の課題となります。

(環境・バイオサイエンス学科教授)

<ゼミ紹介>

My Seminar Class

David G. McCULLOUGH

I teach media studies at Kobe College and students who take my seminar classes range from those who are keen on developing careers in television or advertising to students with a love for film and digital media.

Media Studies is a broad field and can involve students in a very wide variety of research methods. These can involve investigation of film aesthetics, social research into media use and media effects, and exploration of practical media production methods.

My third year seminar classes cover media business, audience research, media trends, advertising, photography, history of popular music, comparative film study and magazine design. I also run a series of workshops to introduce students to documentary and short movie production techniques.

In the fourth year seminar I am always surprised by the range of subjects that students choose to research for their graduation theses. This year students are working on media topics related to Brexit, terrorism, Korean culture, television drama, airline advertising and film soundtracks.

All students must complete their graduation thesis in English, something that can prove to be a challenge for us all! As a Global Studies teacher I am particularly interested in the practical work that students do to investigate the world as part of their research. All in all, I find Kobe College students to be enthusiastic, creative and generous in the help they offer to each other. It is a pleasure to work with such fine students.

(英文学科教授)



Visit to Kyoto

ゼミ紹介

難波江 和英

1992年に本学へ赴任して、今年で25年。最初の10年は英文学科、それ以降は総合文化学科でゼミを担当してきました。時代と共に学生は変わり、私自身も変わりました。就任当初のゼミでは、学生も私も「稽古」に励むという感覚をもっていたように思います。そうした気配は、1995年の震災を境にして薄れ始め、21世紀に入ると急速に消えていきました。「厳しさ」より「楽しさ」を優先する時代がやってきたわけです。

それでも、いまの現代思想のゼミでは、時代の変化を超えて大切なものがあるということを伝えたいと思っています。そういう振る舞い自体、古い時代の名残りであることを含めて。3回生のゼミでは、たとえば、岸田秀の『ものぐさ精神分析』、大塚久雄の『社会科学における人間』、今村仁司の『貨幣とは何だろうか』、岩井克人の『ヴェニス商人の資本論』、4回生のゼミでは、内田樹先生との共著『現代思想のパフォーマンス』や、そこで論じられている思想書の抜粋などを読んでいます。それは知識を増やすためではなく、分野の異なる本を多読しながら、それぞれの著者の発想を活かして、自分自身の考えを再編していくためです。私たちは、自分がどう考えるかによってではなく、どのようにしか考えられない人間であるかを知ることによって、新しい思考の地平を夢見ることができるからです。この信仰も、私のゼミでは、現代思想が教えてくれた「大切なもの」になっています。

(総合文化学科教授)



私の誕生日会の集まり

学生の活動紹介 (コンクール受賞、学会発表など)

デモクラシー・ナウ！学生字幕翻訳コンテスト
課題3 最優秀賞 文学部 英文学科 4年生

SIETAR Japan 異文化コミュニケーション学会
“Student Involvement in Socially Conscious Film Screening”
(社会意識の高い映像作品上映における学生参加について)の発表において、学生による字幕作成・上映会実施について報告。(2016年9月17日)
文学部 英文学科 3年生

SIETAR Japan 異文化コミュニケーション学会
“Student Involvement in Socially Conscious Film Screening”
(社会意識の高い映像作品上映における学生参加について)の発表において、学生による字幕作成・上映会実施について報告。(2016年9月17日)
文学部 総合文化学科 3年生

第19回姫路パルナソス音楽コンクール
ピアノ部門 入賞 (2016年5月22日)
大学院 音楽研究科 1年生 (ピアノ専攻)

第40回ピティナ・ピアノコンペティション
全国決勝大会 コンチェルト B部門 ベスト賞
(2016年8月18日)
大学院 音楽研究科 1年生 (ピアノ専攻)

第12回アンサンブル・フェスティバル兵庫2016
重奏、アンサンブル部門 大学、専門学校A部門
兵庫県音楽活動推進会議賞 (2016年9月11日)
大学院 音楽研究科 2年生 (ピアノ専攻)

第15回宝塚ベガ学生ピアノコンクール
本選 大学生部門 第2位 (2016年10月2日)
音楽学部 音楽学科 2年生 (ピアノ専攻)

第17回大阪国際音楽コンクール
声楽部門 [Age-U] オペラコース
エスポアル賞 (2016年10月9日)
大学院 音楽研究科 2年生 (声楽専攻)

第17回大阪国際音楽コンクール
ピアノ部門 [Age-U] 入選 (2016年10月8日)
音楽学部 音楽学科 2年生 (ピアノ専攻)

第18回ショパン国際ピアノコンクール in Asia
岡山地区大会 大学・一般部門 銅賞
(2016年10月29日)
音楽学部 音楽学科 1年生 (ピアノ専攻)

第33回日本ピアノ教育連盟ピアノオーディション
関西地区 D部門 優秀賞 (2016年11月20日)
音楽学部 音楽学科 2年生 (ピアノ専攻)

第3回東京国際ピアノコンクール大学生部門
第2位 (第1位なし) (2016年12月4日)
音楽学部 音楽学科 3年生 (ピアノ専攻)

第26回 日本クラシック音楽コンクール
ピアノ部門 大学女子の部 第4位
(2016年12月6日)
大学院 音楽研究科 2年生 (ピアノ専攻)

第10回バーテン音楽コンクール 自由曲コース
ピアノ部門 連弾D部門 第1位
(2016年12月23日)
大学院 音楽研究科 2年生 (ピアノ専攻)

第29回ピアノフェスティバル 本選
大学生以上の部 優秀賞 (2016年12月25日)
音楽学部 音楽学科 1年生 (ピアノ専攻)

第5回みおつくし音楽祭コンクール ピアノ部門
一般の部 第3位審査員特別賞 (2017年1月6日)
大学院 音楽研究科 2年生 (ピアノ専攻)

平成28年度日本理科教育学会近畿支部大会発表
(2016年11月26日)
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生

第42回日本調理科学会近畿支部大会発表
(2016年12月10日)
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 4年生

平成28年度1.17防災未来賞「ほうさい甲子園」
奨励賞 (大学生部門) 受賞 (2017年1月8日)
【地域創りリーダー養成プログラム防災班】
人間科学部 心理・行動科学科 4年生
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 4年生

平成28年度 近畿地方整備局研究発表会発表
奨励賞受賞 (2016年6月27日～28日)
大学院 人間科学研究科 M1 (行動科学分野)

<課外活動紹介>

学生自治会

文学部 英文学科 2年生

私たち学生自治会は役員16名で活動しています。学生自治会の主な活動としては、文化活動やスポーツ活動の支援です。また、大学と協力して学生自治会アンケートを行い、学生が充実した大学生活を送れるようアンケートで得た意見や要望をもとに、学校内の施設等を改善する努力をしています。トイレ改修、Wifiの設置、コンビニとATMの誘致は学生の意見を反映させたものです。更に今年は、紙媒体のアンケートからネットアンケートに変えることにより学生にとって答えやすいアンケートを作ることができました。また、毎年夏と冬に学内献血活動を行っているのですが、今年の冬献血では受付者数123名、献血者数54名という過去最多の人数となりました。学生の皆さんに献血の大切さを伝え協力してもらうため、積極的に広報活動を行ったことがとても良かったと思います。全員で同じパーカーを着用し、腕章をつけて活動しているときはとても誇らしく感じます。他にも私が学生自治会に入る動機の一つとなった入学式前に行う新入生に向けてのクラブ紹介やキャンパスツアーがあります。特にたくさんのクラブがお互いに協力しながら運営して行く行事は大変ですが構想を練って実行に移していく中で学ぶことがたくさんあります。仲間と協力し目標を達成した時はとても嬉しいです。学年、学科を超えた仲間を作りたくさんのことを学べるのが学生自治会の良い所であると思います。



10月に行われたビンゴ大会にて

岡田山祭2016「祭色兼美」

大学祭実行委員会 委員長

「祭色兼美」をテーマに行いました2016年度神戸女学院大学岡田山祭は、90名近い委員をはじめ神戸女学院生の個性が光ると、このテーマを大切に当日まで企画・運営をさせていただきました。今年は、1日目に祇園さんをお迎えしてのビンゴ大会など中庭企画を充実させ、2日目には関西コレクションコラボのファッションショーだけでなく、男性モデルを起用した胸キュン選手権や、多くの方にご参加いただいた内田樹名誉教授による特別講義など新しい企画に挑戦しました。ファッションショーは、河北麻友子さんとブレイク☆スルーさんをお招きし、これまでとは全く新しい形でお届けしました。また、学内外の数多くの団体が模擬店出店、舞台発表にご参加くださり、例年にも増した盛り上がりを感じております。

天候にも恵まれ、無事に終了いたしました2016年度岡田山祭ですが、私たち委員だけで成し遂げられたものではございません。ご尽力くださった顧問の先生方や大学関係者の皆さまをはじめ、ご来場くださった皆さま、岡田山祭に関わってくださった全ての方々に御礼申し上げます。委員長を通して、多くのことを学ばせていただきました。学内外の多くの方々との繋がり、委員みんなとの絆に助けられるなかで、どれほど支えられているのかに気づくことができました。このような素晴らしい経験をさせていただきましたことに深く感謝いたします。次年度も大学祭実行委員会を宜しくお願い申し上げます。



3 回生集合写真

中高部報告

Connect KCの野望

高等学部 1年生 6名

「10代だからと言い訳せずに、思いを行動に移したい」「将来について真剣に考えたい」「社会情勢について語り合いたい」

一昨年のエンパワーメントプログラムで種を蒔かれ、Connect KC として発足してからはや一年半。私たちは、ティーンエイジャーとして感じた率直な願いを実現しようと活動してきました。現在、私たちは校内用ウェブページにて、信念を持ち、目標に向かい積極的に活動されている団体や企業インタビューを紹介しています。

成果だけみると、読んでいるだけの自分には遠い話だと思われるでしょうか。「凄いな」という感想は他人を買ひ被り、自身を貶めてしまうものだと思います。実際、歩みが心配なほど遅かった私たちは何もかもが手探りでした。企画書からアポ取りから取材まで、初めての時の緊張感は忘れられません。それでも、仲間と新しいことにチャレンジすることは本当に楽しいのです。

また、活動を通して「人の繋がり」の強さを何度も認識させられました。話をお伺いした方の多くが、自身の活動の発端に、志を同じくする仲間や先人活動家の存在を挙げました。もし行動できずうじうじしている方がいらっしゃれば、同志を集めることから始められてはいかがでしょうか。そしてConnect KC も、そんな方を繋げるプラットフォームでありたいと願っています。

かめのり中高生アンバサダープログラム

中学部 3年生

私は、1月21日～29日にかけてかめのり中高生アンバサダープログラムに参加しフィリピンに行き、たくさんの経験をしました。

3日間、現地の日本語を学んでいる中高生3人と日本人1人のグループで防災をテーマにワークをしました。ほぼ英語での話し合いだったので、意思疎通をするのが大変でした。しかし、何とかお互いに理解しようと協力し、3日目のプレゼンテーションでは、ベストプレゼンテーション賞をいただくことができました。違う国の子たちと困難も喜びも共有できた素敵な経験でした。

ホームステイでは、バケツに水を張り、桶で体を洗い、トイレでは手と桶を使ってふかなければなりません。また、フィリピンは貧富の差が激しく、街を歩いていると裸足のガリガリの子どもたちに物乞いをされました。ガイドさんに言われていたので、何もしてあげられず、すごく複雑で哀しい気持ちになりました。これらの経験から、自分がいかに普段恵まれた暮らしをしているのか感じさせられ、感謝しなければいけないと思いました。

字数の関係で書ききれないのが残念ですが、他にも様々な貴重な経験をたくさんさせていただきました。ここで学んだことをこれからも自分の糧にするのはもちろん、色々な人に伝えていきたいです。このプログラムを支えてくださった、かめのり財団、ホストファミリー、AFSの方などすべての方に感謝します。

マロニエ賞受賞

マロニエ賞は、兵庫県私学に在籍し、文化・スポーツ等の大会で全国1位あるいは世界3位以内入賞した生徒に県知事から授与される賞です。県になじみの深いトチノキのフランス語名にちなんで命名されたそうです。今年度は昨年12月21日に19校の39個人、6団体に賞が授与され、本校生3名もその栄誉に浴しました。S3の生徒とS2の生徒は、昨年4月にルーマニアで開催された2016ヨーロッパ女子数学オリンピックに4名の日本代表の中のメンバーとして出場し、銅メダルを受賞しました。2人とも数学オリンピック財団主催の春期合宿で他のメンバーと切磋琢磨した後、ルーマニア大会では世界39の国や地域から来た選手たちと交流し、楽しく貴重な経験をしました。S3の生徒は昨年度も数学甲子園全国大会優勝によりマロニエ賞を団体受賞していますので、2年連続の受賞となりました。また、S2の生徒は来年度の女子数学オリンピックにも日本代表として出場予定です。

J3の生徒は、昨年9月25日開催の第40回全国学生書写書道展 席書の部で、中学生の最優秀賞にあたる「文部科学大臣賞」を受賞しました。「果敢な挑戦」という課題で、960の応募作品中、最優秀になりました。幼稚園の年中で書写・習字を習い始めた彼女は、現在も書道教室の授業や特訓で精進し、書初め展覧会や年賀はがきコンクール等の大会に挑戦し続けています。

(中高部教諭)

修養会 釜ヶ崎訪問報告

高等学部 2年生

釜ヶ崎に足を踏み入れると、何か普段とは違うものを感じるのだろうと思っていた。実際に訪ねてみると、街には大小・新旧様々な簡易宿泊所が目につき、清潔とはいえない服装をされた方も多かった。しかしその風景に対して私は特に驚くこともなく、このような光景なら何度か見たことがあるとさえ思っていた。そしてこれが、私の彼らに対する考え方を如実に物語っていた。訪問を通して、私は彼らのおかれたあまりにも理不尽な状況を知り、その原因を作った社会の身勝手さに怒りを覚えたが、訪問を終え普段の生活に戻った私はその怒りを完全に忘れていた。結局私は彼らをあくまで他人としてしか見ておらず、彼らの問題は自分には直接関係のないものだと、私でなくとも誰かが解決のために働いてくれるだろうと思っていたのだ。そしてそう気づいても、私が彼らのために何か現実に行動を起こすことはなく、自分勝手に無責任なのは社会ではなく自分であったと知った。そうした中で、ふといつも母に言われていたことを思い出した。釜ヶ崎に届ける衣服やお米を募るという手紙を持って帰ると、彼女は「誰かが協力してほしいと言っているのだから、きちんと協力しなさい。」と言っていた。いつもは聞き流していた言葉だが、それが本当に私にできる唯一のことだと今は思う。弱い人間である私だが、そうであるからこそ、これから与えられる「協力」の機会だけは逃さないようにしたいと思う。

2016年度中高部冬山スキー

高等学部 2年生

12月21日(水)～24日(土)の4日間、冬山スキー実習が行われました。参加はJ3学年23名、S1学年16名、S2学年6名の計45名、引率教員は9名が参加しました。

1日目、バスに約7時間揺られながら、長野県志賀高原へと移動し、宿泊のチウホテルに到着した後は、レンタルスキーを合わせるなど各自明日の準備をしました。2日目、私たちはグループに分かれ、それぞれの引率の先生方と共に実習を行いました。3日目、前日の雨で雪が解けシャーベット状のゲレンデコンディションでしたが、午後から少しずつ雪が降り、初心者から上級者まで上達しながらスキーを楽しみました。夕食後にはクリスマス祝賀会が行われ、チーム対抗のゲームをしたり、突然現れたサンタとトナカイにプレゼントを貰いました。ケーキもいただきとても楽しいひとときを過ごしました。4日目、冬山スキーも最終日となりました。3日目とは違い、前日の降雪で転んでも痛くないふかふかの雪の上をたくさん滑ることができました。私は小学校以来のスキーだったのですが、最初はこけてばかりでまったく滑れず、かなり不安になりましたが、引率の先生方の優しいご指導により最終日にはなんとか滑れるようになりました。皆大きな怪我も無く、無事に冬山スキーの日程を終えることができました。

関わってくださった全ての方に感謝します。

2017年度中学部入試結果報告

日程：2017年1月14日(土)・16日(月)

募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続完了者数
135	260	254	158	143

(中高部事務室)



卒業生シリーズ礼拝

中高部では毎年、「卒業生シリーズ」として、卒業生をお招きする礼拝を守っています。今年も2月21日、23日、24日に3名の卒業生をお招きすることができました。(21日にお招きしていた堀下智子氏はご事情により3月14日の礼拝を担当していただくことになりました。今回の報告には間に合いませんでしたが、ご奉仕に感謝いたします。)

同じキャンパスで学び、同じ講堂で礼拝を守ってきた卒業生の言葉によって、在校生には自分の歩みを確かめ、将来の希望を新たにすることが与えられたのではないかと感じています。

21日は中村融子氏をお招きしました。中村氏は、中高部時代に「探究」で使った発表のための装置と大学での発題の資料を提示くださり、それが中高部の仲間との合作であること、卒業後も中高部時代の仲間と協力し合えることの喜びを話してくださいました。

また、中高部での6年間は夢のような時間であったと感じるが、その夢のような時間が自分にとってはやはり現実であるのだという話をしてくださいました。卒業後、様々な場面で、中高部で培ってきた考え方や生き方が、厳しい現実論に直面することがあったとしても、中高部で過ごした6年間の経験こそが皆さんを守る盾になるはずだと力強く励ましてくださいました。

23日は森啓子氏をお招きしました。森氏は、様々な選択、決断をする時に「自分の心が動くもの」を一つの指標にするという生き方をご自身の経験をもとに話してくださいました。外的な要因に従うのではなく、「自分の心が動く」ということを根拠にすることで、学びについても「自分事化」することができるのだという言葉が印象的でした。自ら判断し、決断してゆく姿から神戸女学院が大切にしてきた「自由」のあり方を感じさせられました。歴史的に縁のあるマウントホリヨークで学ばれた経験からも中高部での学びの意味を考える機会を与えられました。

24日は窪内万葉氏をお招きしました。窪内氏は、大学でのフィールドワークや様々な学びの経験から、中高部で自分が大切だと思ってきた事柄が社会

では決して「当たり前」ではないのだと気付かされたことを話してくださいました。当日の讃美歌の歌詞「美しい大地は私たちの神が与えられた恵み、貴い贈り物、分け合い、助け合う、希望満ちる大地、その全てのものはみんなの嗣業だ」を引用しながら、「本当にそうであればいいのに」と多くの人が願っていても、それが実現しないという社会の現実と向き合った時の苦悩について語ってくださいました。中高部で学んだ事柄があるからこそ、その苦悩と向き合わなければならないのだということ、しかし、中高部で与えられた「恵み」こそが決断の場面では背中を押してくれる暖かい風であり、光に照らされた道を歩むための呼び声なのだと話してくださいました。

今年も、私たちの最も大きな財産の1つは、神戸女学院での学びを語る言葉であると改めて確認する機会となりました。卒業生の姿は、在校生にとっては、将来の希望でもあり、現在の自分のあり方を映す鏡でもあると思います。輝いて見える先輩たちも、自分たちと同じように悩み、語らい、祈ってこられたのだという事実が在校生の励みになったと思います。

こうした機会を通して、中高部での学びの意味と共に考える機会が与えられましたことを神様に感謝いたします。

(中高部教諭)

<先輩からのメッセージ>

“女学院育ち”の誇り

石本 明香
(中高部卒業)

あなたが誇れることはなんですか?“女学院育ち”のあなたには必ずあるはずです。

私は医師としてこれまで多くの患者様の最期に立ち会いました。その中で強く印象に残っている患者様の言葉があります。「心残りが無いと言えば嘘になる。だけど自分の人生で誇れるものがあるのは強いんですよね。」自らを誇る何かがその人の生き方に輝きを与えるのです。

では私が誇れるものとは何か。一つは“繋がり”です。私自身これまで常に周囲の人に恵まれ、可愛がっていただきました。この多くの“繋がり”が得られたのも、価値観もバラバラで個性的な集団である神戸女学院生の中で、互いを認め合い、尊重する姿勢が自然に身に付いたおかげだと考えています。また、これまで何人もの上司から“神戸女学院出身者は何か違う”という言葉いただきました。これはこれまで、“女学院育ち”で得た何かをもつ同窓生たちが社会の中で築いてきた評価であり、神戸女学院の伝統とも言えます。

そして最高の友人たちも然りです。卒業して12年がたちますが、いつ会っても神戸女学院の友人はそれぞれにキラキラと輝き、尊敬できる面ばかりで、会うたびに刺激を与えてくれます。

このように“女学院育ち”は私に多くの誇れるものを与えてくれました。後輩の皆さんには、私たちの“誇り”である神戸女学院の伝統を引き継ぐとともに、新たな伝統を築きあげていってほしいと願っております。



研修医時代の同期と

楽しい経験たちと専門性と

関谷 遥香
(中高部卒業)

国家公務員として財務省に就職して早10年。これまで、経済連携交渉、海外経済分析、コーポレートガバナンス改革等に携わり、イギリス留学、仙台国税局や金融庁への出向等々、様々な分野・場所で仕事をしてきました。1、2年ごとに新たな挑戦ができ、刺激的で充実した毎日です。

神戸女学院でも、バスケ部、自治会、体企といった校内活動、水上隣保館訪問を初めとする校外活動に多く参加しました。他にも訪米・訪豪等、他では得られない貴重な機会が神戸女学院生活には溢れており、学生の皆さまにはぜひぜひ活用していただきたいと思います。大学進学後も、社会人になっても最初の内は、「ちょっと無理かも」ぐらいのことに踏み出してみると自分の幅がどんどん広がるので、果敢に挑戦してください。

こうして、楽しく発散系に歩んできた私は、30代になり、「自分の専門は何か」を改めて考えています。少なからぬ日本の会社や役所（特に文系採用）は、浅く広いジェネラリスト志向とされるのに対し、国際交渉や国際会議に出ると、この道何十年、リーマン危機対応や、WTO 交渉をやったなんて人が相手で、浅く広いでは太刀打ちできません。好奇心旺盛、悪く言えば集中力の無い私は、様々な経験を通じて漸く、自分の適性や関心が分かって来て、それを磨く段階に入りつつあるのかなと思います。通って来た経験たちは、全く無駄ではなく、貴重な財産になっていることも付け加えたいと思います。



OECD（経済協力開発機構）への出張時にパリの本部ホールにて

第51回中高部長賞 第32回文化・スポーツ賞

今年度の第51回中高部長賞表彰式は2016年12月20日(火)の2学期終業日に行われ、Jはギター部、テニス部、新体操部の3クラブ、SはESS部、演劇研究部、バレーボール部の3クラブ、計6クラブが受賞されました。受賞クラブには表彰状と盾、副賞の5千円が贈呈されました。

第32回文化・スポーツ賞表彰式は2017年1月30日(月)に行われ、受賞者には中高部長林先生から表彰状とメダルが贈呈されました。文化・スポーツ賞は、学校代表として各大会やコンクールへ参加し、顕著な成績をおさめた個人、団体に授与されるものです。賞の基準は西宮・阪神地区で第1位、兵庫県・近畿・全国で第3位以内とするものであり、選考委員で審議し受賞者をそれぞれ決定しました。

中高部長賞、文化・スポーツ賞は、生徒のクラブ活動や、学校生活での活性化を願い、生徒の努力を称えることが目的であります。来年度もたくさんの受賞者が選出されることを願っています。

施設課の方々には表彰式にふさわしい会場を設営していただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

第51回中高部長賞

J ギター部、J テニス部、J 新体操部
SESS 部、S 演劇研究部、S バレーボール部

個人情報保護のため、
64ページ目から
65ページ目左段は
一部削除しています。

第32回文化賞 (33名)

☆2016ヨーロッパ女子数学オリンピックルーマニア
大会日本代表 銅メダル

☆2016ヨーロッパ女子数学オリンピックルーマニア
大会日本代表 銅メダル

☆第8回日本地球惑星科学
連合賞

☆第32回成田山全国読書大会 読売賞

☆第21回全日本高校・大学生書道展 全日本高校・
大学生書道展賞

☆第21回全日本高校・大学生書道展 優秀賞

☆第55回全国高等学校生徒英作文コンテスト
最優秀賞

☆第6回上智大学全国高校生英語弁論大会 第2位

☆第21回ディベート甲子園近畿・北陸地区予選
第2位 (4名)

☆平成28年度阪神 E.S.S. ユニオンシナリオリー
ディングコンテスト 優勝 (9名)

☆数学・理科甲子園2016兵庫県予選 第2位 (8
名)

☆上野学園・ゴードンストン英語コンテスト
第1位

☆第12回英語レシテーション・コンテスト 第1位

☆第49回私学の書展 特選呉竹賞

☆税の書道 西宮・宝塚租税教育推進協議会賞

☆税の書道 西宮納税貯蓄組合連合会会長賞

☆税の書道 西宮納税貯蓄組合連合会会長賞

第32回スポーツ賞 (18名)

☆第60回兵庫県中学校総合体育大会テニス競技団体
戦 第3位 (10名)

☆第13回兵庫県中学校秋季テニス大会学校対抗の部
準優勝 (10名)

☆第4回兵庫県中学校冬季テニス大会団体戦
第3位 (8名)

(中高部教諭)

<留学報告・生徒の活動報告>

バージニア州での一年

高等学部 3年生

アメリカ、バージニア州での1年は新しい体験に満ちたものでした。家の周りは緑が豊かで色とりどりの野鳥が見られ、夏にはホタルがいる。道路の真ん中に寝そべてホストブラザーとおしゃべりをする。パーティーが大好きなシスターにダンスを教えてもらおう。本が大好きなシスターと世界観について語る。行事ごとに大勢の親戚同士で集まる。週に3回教会へ行く。あげだしたらきりがありません。なかでもやはり新鮮だったのが学校生活です。授業はすべて選択制で、ファイナンスやジャーナリズムなどのあまりなじみのない授業もありました。1クラスの人数は多くて25人、少ないものでは7人で、先生と生徒の距離はとても近く、ディスカッションがとても多かったです。課外活動ではミュージカルのバンドやコーラスの伴奏に挑戦しました。母国語でない英語を使つての授業や活動は思い通りにいかないこともあり、初めの方は黙り込んでしまうこともありました。しかしその悔しさから少しずつ積極的に話すようになり自然と友だちも増え英語も上達しました。留学生活は苦勞したこともありましたが、「察する」の文化が少ないアメリカで、自分が考えていることを周りに伝えることの大切さを学びました。この1年で学んだことをこれからの生活で実践していきたいです。私を支えてくださったホストファミリーや友人、教会の方々に感謝して報告の終わりとさせていただきます。

留学体験記

高等学部 3年生

2015年の9月から2016年の6月まで、スイスのインターナショナルスクールで、国際バカロレア（ディプロマプログラム）というコースで勉強しました。国際バカロレアディプロマコースは、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」を目的とし、6つの教科、課題論文、知の理論、課外活動から成り立っています。課題論文は、神戸女学院の“探究”のようなもので、自分が選択している科目のうちの一つを選び、それに関連したことを日本語なら8000字、英語では4000語書きます。知の理論では、私たちがどのように物事を認知し、理解しているかを考えたり、6教科でそれぞれどのようにそれらの認知・理解が生かされているかを考えたりします。課外活動は、3つの柱、創造性・活動・奉仕から成っており、それぞれに50時間以上を費やすことが義務付けられています。神戸女学院にあるもので言い換えると、創造性は文化系クラブの活動、活動は運動系クラブの活動、奉仕は水上隣保館訪問や雪の会の活動などです。神戸女学院の中学部ではクラブに所属するのが義務付けられていますが、国際バカロレアでも、課外活動を先述の時間以上しなければコース修了を認めてもらえません。最高に充実して有意義だった一年間を私に与えてくださった全ての方々に、心から感謝します。

冒険への後押し

高等学部 3年生

短い高校生活の3分の1を異国の地で過ごすことをどう思いますか？

冒険心は人それぞれですが、悩み始めるととことん悩んでしまう私が信頼する人のいない土地で1年間を過ごしたのは奇跡に近いかもしれません。そんな留学生活の中で宗教に触れる機会が多かったというのがもしかしたら心の支えになっていたのかもしれないです。現地の学校がクリスチアンの学校であったということはもちろんですが、教会に毎週のように通い、そこでは、日本の教会と違い、開放的で信仰心を共有しあうというような感じでした。はじめは牧師が言っていることが分からなくて、戸惑ったこともありましたが、それにもだんだん慣れて、バンドの演奏による讃美歌や苦勞の末にキリスト教に救いを求める人の洗礼など日本であまり見られない形の礼拝を楽しむことができました。教会での体験が留学生活の3分の1ほどを占めていたのではないかと今は思います。

海外ではトラブルはつきものです。勉強についていくのが大変というのはもちろんですが、生活リズム、ルールなども全然違います。日本での生活より不便になることの方が多いと思います。学校生活でも神戸女学院との違いを感じるもののほうが多く、どこか充実感が得られないことがあるかもしれません。でも、自分が決めたことはどんなに辛い思い通りにならなくても留学してよかったと思える日がいつか来ると思います。胸を張って冒険への一步を踏み出してください。

<課外活動紹介>

[クラブ] Jバスケットボール部

中学部 2年生

支え合い

Jバスケットボール部は年に4回ある公式戦に向けて、先生方や先輩方に教わりながら、J2が2名、J1が12名で日々練習を積み重ねています。

バスケットボールはチーム競技なので、時には味方と息が合わなかったり、失敗したりすることもあります。チームだからこそ、お互いに「ナイス」「ドンマイ」と声を掛け合うことができます。

これからも味方同士で支え合える喜びを感じながら、楽しみ、集中して練習に励んで、勝利を目指していきたいです。

[クラブ] J家庭科研究部

中学部 2年生

私たちJ家庭科研究部は、毎週月・火・木曜日に被服室で活動しています。

バレンタインの時期にはお菓子作り、夏休みは昼食づくりをしますが、普段のクラブではキャンパス見学会や愛校バザーや文化祭などの学校行事への準備、施設の子たちへのクリスマスプレゼントの制作など、手芸を主にしています。特に愛校バザーと文化祭は作業量が多いので部員全員で協力し合って成功させることができた時は、とても達成感があります。

これからも笑顔の絶えない楽しいクラブができるように頑張ります。

[クラブ] S写真部

高等学部 2年生

S写真部は、S2からJ3までの約30人で活動しています。主に、テーマを決めてその場で写真を撮る撮影会と、あらかじめ撮った写真を部員で共有し、良い所やアドバイスを出し合う品評会を行っています。愛校バザーや文化祭では部員が撮った写真をポストカードとして販売しました。試行錯誤して撮った写真が完売したときは充実感がいっぱいでした。

写真部は部員がフレンドリーで、お互いが撮った写真を尊重しあう雰囲気がとても伝わってきます。その和やかさが写真部の魅力だと感じています。

[クラブ] Sフットサル部

高等学部 2年生

わたしたちSフットサル部は年に3回ほどある試合に向けて練習を重ねています。全員がフットサル未経験者なので、分からないことも多いですが試行錯誤しながら練習内容を決め、限られた練習時間の中で少しでも上達できるように部員全員で協力しあい、クラブ活動を行っています。試合数は少ないですが、日頃の練習の成果を発揮しプレーすることは何事にも替えられない充実感があります。これからも練習に励んでいきたいと考えています。

〈学 院 日 誌〉

1月10日(火)	中高部始業日	2月22日(水)	理事会 中高部教員会議
1月11日(水)	中高部教員会議	3月1日(水)	高等学部卒業式
1月14日(土)・15日(日)	大学入試センター試験	3月6日(月)	教授会
1月14日(土)・16日(月)	中学部入学試験	3月7日(火)	文学部・人間科学部一般入学試験 (後期日程)
1月20日(金)	教授会	3月8日(水)	中高部教員会議
1月25日(水)	理事会 中高部教員会議	3月16日(木)	大学卒業式、大学院修士学位記授 与式 中高部教員会議
1月27日(金)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期A日程)	3月17日(金)	中学部卒業式、中高部終業式
1月27日(金)～29日(日)	音楽学部一般入学試験〈前期A日 程〉	3月20日(月・祝)	オープンキャンパス
1月28日(土)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期B日程)	3月22日(水)	理事会 臨時評議員会 臨時理事会
2月8日(水)	中高部教員会議		
2月10日(金)	教授会		
2月14日(火)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期C・D日程)		

目

アメリカのリベラルアーツカレッジ視察報告…1
KCC だより ……3
KCC だよりに添えて ……5
2017年度年間標語…6
クリスマス報告…7
退職のことば…9
史料室の窓・人生の誠律…13
人事・慶弔・栄誉…14
新刊紹介…14
その他の新刊一覧…15
キャンパスお気に入りの場所…16
大学報告
高大連携授業報告…17
大学と社会の危機の中で…18
クローバーゼミ始動！…18
第41回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) 大会報告…19
第7回神戸女学院大学絵本翻訳コンクール表彰式…19
子どものためのクリスマス・コンサート…20
前進を続ける国 ポーランド…21
2016年度音楽学部定期演奏会報告(12/2)…22
第8回舞踊専攻卒業公演…23
「みんなでつくるクリスマス～せっからサンタの贈りもの～」を通じて…23
環境・バイオサイエンス学科3年生西山春佳さんが、 日本理科教育学会近畿支部大会で口頭発表しました…24
中庭で発見されたワスレナグモ…24
2016年度文学部卒業論文題名…25
2016年度音楽学部卒業演奏会演奏曲目…38
2016年度人間科学部卒業論文題名…40

次

2016年度文学研究科博士・修士論文題名…44
2016年度音楽研究科修士公開試験曲目…44
2016年度人間科学研究科修士論文題名…45
先輩からのメッセージ…46
2017年度大学入試結果中間報告(2/6現在)…47
派遣留学報告…48
認定留学報告…49
受入れ留学生報告…50
研究所活動報告…51
女性学インスティテュート活動報告…53
2017年度夏期語学研修参加者募集…54
私の研究…55
ゼミ紹介…56
学生の活動紹介…57
課外活動紹介…58
中高部報告
Connect KC の野望…59
かめのり中高生アンバサダープログラム…59
マロニエ賞受賞…60
修養会 釜ヶ崎訪問報告…60
2016年度中高部冬山スキー…61
2017年度中学部入試結果報告…61
卒業生シリーズ礼拝…62
先輩からのメッセージ…63
第51回中高部長賞、第32回文化・スポーツ賞…64
留学報告・生徒の活動報告…65
課外活動紹介…67
学院日誌…68